

いいだ未来デザイン2028

【2022(令和4)年度】 いいだ未来デザイン会議 全2回記録

令和4年12月
飯田市企画部企画課

いいだ未来デザイン 2028 第1回いいだ未来デザイン会議

市長あいさつ及び委員長あいさつ

【佐藤市長】

- ・皆さんこんにちは。市長の佐藤です。本日は大変にお忙しい中、本年度第1回目のいいだ未来デザイン会議にご出席をいただき、誠にありがとうございます。本来であれば、実際にお集まりいただいて顔を拝見しながらお話ができればよかったのですが、コロナ禍でWeb会議形式の開催となり、お手間をおかけし恐縮ですがよろしくお願い致します。
- ・先ほど企画部長からご紹介のあった4名の新しい委員の方におかれましては、前任者の残任期間の今年度末まで、どうぞよろしくお願い致します。
- ・いいだ未来デザイン 2028 は、市の総合計画にあたるもので、2017年から2028年までを期間としています。令和3年度は中期計画4年の1年目にあたるわけですが、本日は令和3年度の取組についてご意見いただいて、これを令和5年度の小戦略（年度戦略）に生かしていくということになります。ぜひ日頃お考えの点やお気づきの点をご指摘いただければと思います。
- ・現在飯田市、南信州地域では信州大学の新学部の誘致に取り組んでおりますが、いいだ未来デザイン 2028には盛り込まれていない取組です。しかしながら、信大誘致はこの地域の将来にとって非常に大きな意味を持つものであり、飯田市としては「大学のあるまちづくり」をどう進めるのかという観点から、来年度以降の戦略計画には欠かせないものだと思っております。本日は令和3年度の取組の評価が中心ですので、大学誘致について直接ご意見をいただくという場面ではありませんが、来年度の戦略計画を考える上で、「大学のあるまちづくり」は大事なキーワードでありますので、今年度第1回目のいいだ未来デザイン会議で申し上げておきたいと思っております。信大内部での検討状況につきましては、新学部の意味合いと言いますか、どのような人材を育成したいのか、どういう意義を持つことになるのか、そのあたりを再度整理した上で立地について考えるというお話を中村学長からいただいております。動きが外から見えにくい状況になっておりますが、この地域としてしっかり大学誘致に取り組み、大学関係者の皆さんや学生、教授の皆さんにぜひ飯田キャンパスが欲しいと言ってもらえるようなまちづくりをしていきたいと考えています。ぜひ委員の皆さんにも大学誘致にご関心を持っていただき、「大学のあるまちづくり」という観点で今の政策を見るといったことも、今後お願いしたいと思っております。
- ・先ほど申し上げましたように、今日は令和3年度の取組を振り返っていただくということで、ぜひ忌憚のないご意見、またそれぞれの専門的な知見からのご意見をいただければと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

【下平委員長】

- ・皆さんこんにちは。委員長の下平と申します。市長のお話にありましたように、私どもは一期2年の任期の2年目になります。この度4名の委員の皆様が交代ということになりまして、残任期間という形になりますが、しっかりご協議いただき、このいいだ未来デザイン 2028をより良いものにしていければと思っております。
- ・私は、このいいだ未来デザイン 2028は市民と協働して運用していくものだろうと捉えております。私たちも勉強し、市民の皆さんにそれをお伝えして意見を伺った上で、代表して私たちがこの会議で意見を交わす、その結果として計画が実現できるような形が一番望ましいわけです。
- ・論より実践が一番大事ですので、そのような点も踏まえながら将来に向けて住みよい飯田市づくりの実現を目指して議論をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

いいだ未来デザイン2028 「2021（令和3）年度基本目標評価シート」及び「2022（令和4）年度戦略計画の評価についての意見交換の内容

いいだ未来デザイン会議委員からのご意見・ご提案	ご意見・ご提案に対する回答
<p><基本目標1 稼ぎ、安心して働ける「魅力ある産業」をつくる> 【青山委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当社では、データ管理がすごく重要でデジタル化をしないと大変なことになるため、求人を8月上旬から出したが、なかなか募集がない。一方で飯田に戻りたいが会社がないという人もいる。 ・求人サイトには、リクナビ等もある。イイダカイシャナビについては検索すると、例えば飯田で働きたいと検索すると、すぐに出てくるようになっているのか。 ・検索したときに上位3番目ぐらいまでに入らないと、見てもらえない。WEB広告等で働きたいキーワードを入れると出てくるなど、気づいてもらえるような取組はあるか。 <p>【高橋委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症が、観光業に対して大きな影響があったということでは否めないところである。 ・現在は、個人旅行を含めて回復基調にあり、様々な業態、業種があることから後を追ってだんだん影響が出てくる。 ・コロナ禍で3年が経過し、経済を動かす局面に入っているだろうと、日々の仕事を通じて感じている。コロナ禍による停滞期にあっても、新たなコンテンツとしてストックになるようなふるさと再発見ツアーの様々なプログラムを積み重ねることができたため、そういったものを今度は外に向けた外貨獲得のために使っていきたいと考えている。 <p>【青山委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市田柿の越境という部分で、7カ国で販売することができたということはすごく良かったと思う。 ・市田柿以外、例えばシードル、ワイン、農産物などの越境やEC、そのやり方を市民向け講座としてやっていただくことはできないか。 ・起業してない人でも、やり方が分かれば起業できる。ヒントを与える機会があるといい。誰でも発信できる時代であり、カメラ撮影の勉強会では、インターネットで物を売る際に、写真映りの違いだけで売り上げが違う。WEBサイト 	<p>【申原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取り組んでいるところであり、課題認識を持っている。 ・今の段階では、イイダカイシャナビは、過去において情報更新等を行っていない時期があり、まずはサイトの中身作りを今一生懸命取り組んでいる。様々な会社があり、そこで若い社員のコメントが動画で流れることや、直接そのカイシャナビのサイトを通じて会社の総務の人や経営者の方と接触ができること。そういったことを考えてサイト作りをしている。 ・検索時に上位に出てくるようにすることと、高校卒業する時点で飯田市では求人情報を発していると知ってもらうことをやっていきたい。大学生で就活を考え出したときに、確か飯田市では求人情報を発信していて、今はどんな求人があるのかと思いついてもらえるような取組をあわせてやっていきたいと思っている。 ・ご指摘いただいたことを含めて、様々な課題があることから、一つ一つ取り組んでいきたいと考えている。 <p>【申原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京大阪京都のゴールデンルートで1回来た方が、2回目以降をどうするのか。インバウンドの時代まで含めた際に、飯田市で本物体験、本当に価値のある旅をしてもらう、高質な旅をしてもらう、日本の原点を知ってもらう取組を積み重ね、それがいずれ魅力を持って伝わり、インバウンドを含めて人が集まってくるときが来る取組であると思う。 ・市も一緒に連携して進めていきたいと思う。 <p>【申原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業センター、エス・バードで工業技術大学講座をやっている。今までやっていない内容でも、1つのテーマとして掲げてそこでやることはできると思う。 ・個人で行うECでも、カメラ写りによって売れ行きが全然違うという話も聞いている。現在は、あくまでも企業や事業所の取組をどう支援するかについて取り組んでおり、個人の方の支援までは及んでいない。 ・ビジネスプランコンペの指摘の中で、コンペをやって表彰して立ち上がった事業は宣伝するなどを行っているが、起業した人たちがその後、事業を縮小し

での販売をするにあたって、何をどうすると結果が出るとかそういったソフト面のところの強化とか、勉強会等をやっただけのいい。勉強会や輸出の部分での敷居を下げてより広がるような取組など今年やっていることはあるか。

- 個人レベルから、もう一歩大きなボリューム、企業に結びつけていくための何か手助けはあるか。

【森竹委員】

- 稼ぎ安心して働ける「魅力ある産業」を作るというテーマの中で、少子化が非常に問題になっている。子どもたちに、「この地域は将来的に活力がなくなってしまう」という、ある種の危機感を植え付けるのではなく、そういう懸念を情報として共有する機会があったらいい。
- 進学率が高くなり、ほとんどの子どもが専門学校や大学へ行き、飯田市へ戻ってきて就職していない中で、人口減少は取組課題の1つである。
- 子どもが10代の時から、自分の住んでいるまちは今どうなのか、将来的にどうなるのか、何かの機会、話をする機会があっても良いと感じる。

【寛委員】

- 北海道に通算10年間転勤で行ったことあり、札幌が人気であるが、長野もすごく人気がある。札幌といえば北海道大学のイメージがあると思う。あの爽やかさを求めている若者もいる。札幌、北海道が目立つが長野も決して引けを取らない。長野から他県の大学に行くと、最初に爽やかな県から来たねというのが第1印象。地域性としてはすごくラッキーだと思う。
- 飯田に人を残すという発想よりも、いろんなオケーションによってもっと初期段階で若い人にこのまちを知ってもらう、この地域の良さを知ってもらうことが重要だと思う。
- そのために、先行投資で費用対効果は若干遅れたとしても、若い人に経験してもらう術ということに力を入れてもらいたい。来てもらうのか知っているだけかでは、大きな差がある。もっとお金をかけて、時間と知恵を出せばさらにこのまちに接してもらうオケーションは増えていくと思う。
- 今日集まっている事務局の方は市のシンクタンク中のシンクタンク。大いに旗振り役で多方面から考えていただきたい。ムトスぷらざは成功例だと思う。フリースペースと図書館コーナーを設置したことにより、若者がどんどん集まっている。実際やっているのだから絶対できないことはないと思う。

たり辞められたりする場合もあり、その間、フォローや支えることをすべきという指摘をいただいている。チャンスを作っていくことを一緒になってやっていくことは必要だと思う。

【串原産業経済部長】

- 去年から今の中心市街地のエリアで、今どういう状態になっているのか。それが後継者問題を含めて、5年後10年後どういことが予測されるのか。そういうことをしっかりと捉えて見直す必要があり、議論してきた経過がある。
- 本年度はその取組を整理し、例えば、地元の東中学校の子どもたちに、地域学習の中で知ってもらうことも大事だと思っている。
- 飯田市全体の人口減少などの問題について、市の企画課で調査をしている。今後子どもだけでなく大人にもわかりやすい形で公開し、みんなで勉強し合っていくことが大事である。
- 学校での扱いについては別の班になるため、それはまた事務局から意見があったことを伝えてもらうようにしたい。

【中村委員】

- 農業の面からいっても後継者が減ってきた。どんな産業もそうだが、農業の分野では、儲かっている農家や法人化している農家は後継者が入ってきて、若い力でどんどんやっている面もある。飯田の活性化も同じことかと思う。
- 農業は最終的には食べることで、「食」が一番大事になってくるが、飯田は「食」が弱い。例えば、一杯飲みに行く焼肉ではなく、昼間食べる焼肉屋がないことは「食」が薄い、弱いなという気がする。
- 本来の飯田の売りは丘の上の商店街だと思う。ただ、現在の丘の上は、シャッターが降りているお店や空き地が多くなっている。市は一生懸命、企業やオフィス誘致をしているが、丘の上に絞ってみてはどうか。人の集まる通りがあると、そこに食の文化、若者の交流の文化、交流サイトが出てくる。
- 現状では、住居兼店舗が多い。飯田下伊那にはいろんな企業があるため、丘の上に誘致して整理ができれば、かなりの人を集めることができ、飲食店も賑わうのではないかと思う。
- 気楽に飲んでから帰ることができる環境をどうやって作っていくのか。公共交通機関を使うことも含めて、これからの丘の上の課題だと考えている。
- 農産物の関係は、インターネットなどいろいろな形で世界中に売っているが、やはり直売所のお客さんが、一番リピート率が高い。人が集うところを多く作っていくことを期待している。

【青山委員】

- 丘の上において、夜の代行の問題がある。公共交通機関の電車で対応することは、もちろん良いことだと思うが、例えば各方面にバスを走らせることは難しいものなのか。市街地を活性化するには、思いだけではなく、市街地に人が来ない何か理由があり、それを解決するための取組が必要なのではないか。
- もちろん代行もすごく良いが、それでも2,000円～3,000円かかると負担が大きい。それが、例えば500円とか300円ぐらいの負担でバスを使えるようにする。その代わり1時間に1本とか1時間半に1本とか本数を限定する。オンデマンドのWEB予約にして、予約がないときには走らせないなど、お金もかからない方法はあると思う。

【森竹委員】

- 2班の分野に関連してしまうが、丘の上の捉え方という部分で、賑わうというのは、居住する人、オフィス、小売りなんかの商店、飲食、祭り、イベントといったものに大きく分けられると思う。飯田市が言っている丘の上の賑わいが、お祭り、イベントに集中しており、丘の上を具体的にどうしたいのかが市民の目からすると見えてこない。

【串原産業経済部長】

- 中心市街地の活性化はすごく大事だと認識しているが、家賃が高いことや権利関係が複雑であるなどの課題がある。今は産業センター、エス・バードのオフィスを中心にしたサテライト誘致を行っているが、空き家対策的な側面も含めて検討している。一方で、中心市街地の活性化にいつまで力入れるのか、市街地振興はもういいのではといった考えの方もいる。しかし、中心市街地の活性化は大事であり、将来に向けてもみんなが寄り付けてくれる場所にしていく必要がある。同じ方向性で考えているため、引き続き支援をお願いしたい。

【串原産業経済部長】

- 飯田市は、他の都市と比べると代行の文化が発達している面もある。
- 定期便が30分に1本、1時間に1本必ず出ると分かっていたら、それに合わせて、飲食して帰ることはあるかもしれない。参考意見として受け止めさせていただく。この先、例えば自動運転が実用化されてきたりすれば、様々な可能性が出てくるとは思う。

【串原産業経済部長】

- 振り返ったときにイベント頼みだったのではないかという部分もある。一方で、りんご並木を中心にイベントをしてきたことで、中心市街地の存在感を何とか維持してきた側面もある。イベントを実施していなければ、もっと大変なことになっていた可能性もある。そういったことを踏まえた上で、ご指摘の通り、やはり居住する人を確保することは重要。それからオフィスとしても使っ

- ・商業施設は、名古屋が中心となったことは、既成の事実である。今更、丘の上をいわゆる飲食除く商業のまちにすることは不可能だとすると、焼肉云々を含めて、飲食の店を出すことは大事だと思う。
- ・空き店舗や空き家を含めて、街の賑わいはどのような方向に持っていきたいかの市の姿勢が見えてこないと感じるため、深堀をしていくことが大事だなと思う。
- ・青山さんの言われたいわゆる定期便は、以前商工会議所でやったことがあり、近隣の商工会からクレームが入って辞めた経過がある。市や商工会議所が主導で行うことは、利益に関わることでもあるため、今までの考え方では厳しい。何か違った方法があれば十分可能であり、青山さんの意見に賛成する。

【青山委員】

- ・代行も利益が出るような、代行に主にやっていただく何かを作ったりするといのかと思う。

【笈委員】

- ・まちおこしの件では、飯田市の取組は進んでいる方だと思う。ただし、もっと進んでいるのはやっぱり札幌。ラベンダー祭りや大通り祭りなど大小混ぜてイベントだらけである。毎月なにかやっているようなイメージで、人も年中集まってくる。すすきのは、旭川の全市民が毎日集まるぐらいの集客力があつた。
- ・今僕らはどんどん面倒くさがり屋になっている。便利が一番。まちおこしとしては一番に考えるのは駐車場問題。飯田市でもドーナツ現象が起こっている。アップルロード沿いにはいろいろな商業施設があるが、同時にすごい数の駐車場を持っている。ところが市街地には駐車場が少ない。空き家の有効利用と言っているが、市街地に来てもらうために一番手っ取り早いのは駐車場の有効確保。費用対効果を除けば、コンビニの横の駐車場スペースも3階建ての立体駐車場にするなど、いろいろなことはできる。当面の繋ぎとしても、市街地に人が来てもらうためにも、駐車場の問題を考えてもいいのではないかと思う。

【竹内委員】

- ・気にしているのは社会動態でマイナスが続いているという現状。飯田市だけの問題ではなく、飯田下伊那全体で問題である。外に出てしまう人が多い理由にははっきりとしないが、コロナ禍においてこの2年で減っている部分もあると感じている。
- ・求人をかけてもなかなか応募がないという話もあつたが、有効求人倍率では、1.0をずっと超えるような状況が続いている状況であり、「仕事」という意味では、仕事自体はある状況だと思う。ミスマッチなのか、どうしてもなかなか合

てもらおうということをやっていかなければいけない。そこに問題意識を持っている。ムトスぷらざも、国、市が資金を投じて取り組んできたところ、人が集まる流れが起きてきている。市街地にいろいろな投資が起きるような取組をうまく誘導していかなければいけないと思っている。

【申原産業経済部長】

- ・市街地の中にはいくつも市営駐車場があり、言い方を変えると市営駐車場は市街地にしかない。寄り付きを良くしてもらうために、1時間無料だったものを、今2時間無料にする試行を始めており、これから本格的に2時間無料とする方向で取組んでいる。歩くまちを目指したいが、寄り付いてもらう仕組みも考える必要があるため、そういったことを組み合わせて考えている。
- ・お店でも慌てて帰ってしまった人が、もう1軒寄っていつてくれる。食事をせず帰ってしまうのではなく、もう1時間余分に居られることで食堂に寄っていくことができる。そういったことができるようにしていきたいと思っている。

致しない。そここのところについては、WEBサイトやイイダカイシャナビをこれからもっと整備していく必要があるかと思う。先ほどGoogle検索してみたが、確かに上位には出てこなかったため、これから進めていくものと思う。

- 社会動態に関しては、近くであれば上伊那、県で見ればもう長野県全体で地域間競争がある。寛委員のご発言通り、長野県はイメージがいいとすると、それは飯田下伊那のことなのか、長野市なのか、松本市なのか、上田市なのか。そういったところも含めて競争していかなければいけない。
- 大きな企業や上場企業の数でいくと、この地域の弱い部分がある。ただ単純に競争しているだけでは、どうしても負けてしまう。吸引力という点で劣ってしまう面がある。この地域の良いところ、特徴を、働きやすさも含めて打ち出していく。飯田下伊那にはリニアというキーワードがある。そういった部分をこれから打ち出していく必要があると感じている。
- 女性が活躍する時代である。女性の進学率も伸びている。そういったお子さんが大学に行き、専門的な領域を学ぶと、飯田ではやりたい仕事がない。そういった話を聞くことがある。女性が働きやすい、女性が活躍できる職場があるとすると打ち出し方も含めて、何か視点があるといい。発信の仕方を視点として入れると良いのではないかと思う。

＜基本目標2 飯田の魅力を発信し、つながる人を増やし、飯田市への人の流れをつくる＞

【三浦宏子委員】

- TV、ニュース、新聞、SNS、Facebook等を見ていて、飯田市が「焼肉のまち」として売りだして、だいぶ知られてきたと感じる。飯田市は「焼肉」というようなブランドがだいぶ固定してきた。お肉の自動販売機もあちらこちらに出てきて、アピールがされてきている。
- UターンIターンの件では、おもしろ科学工場の先生で、6、7年かけて、Iターンに成功した方がいる。その間、市の各部署に相談し、本人の意向を聞き、その中で空き家はどうかということで、空き家をメインに検討した。都会から来る方々は、飯田に自然豊かな見晴らしの良いところを望んでいる。実際には、見晴らしの良いところは住みづらいため、空き家がそういったところはない。その方は、定年退職を機に飯田市に住みたいということで東京と飯田を往復しているが、やはり見晴らしの良いところを選んだ。
- 飯田へIターンで来る人たちは、飯田に知り合いがいて、その関係で来る方が多い。親身になって聞いてあげることなど、人間と人間との繋がりの中で飯田に移住してくる方が多いと感じる。
- 私達が移住定住IターンUターンで考えるイメージは、来てくれたら一生ここに住んでくれること。でも、来る人たちの中には、一生飯田に住もうと思っていない方もいる。そこのところをしっかりと感じて、認識していた方がいいと感じる。

【下平委員】

- 「飯田の魅力を発信し繋がる人を増やす」ということではあるが、まず足元を固めていくことも重要だと思う。飯田に住み続けている方でも飯田の魅力は知らない。また、飯田を分かってくこともあまりないような気がする。
- 例えば、天竜舟下りも自分たちが体験をして、そしてその良さを外に発信していくことも非常に重要なポイントだと思う。子どもたちも、市外から体験学習でよく飯田に来られる。ラフティングは非常に人気があるが、飯田の子どもたちはほとんど体験したことがないのではないかと。体験をしながら、地域を感じ、魅力を発信していく、論より実践が重要だと思う。
- 移住定住でネガティブな面も出ているように感じる。例えば都会から来られた方が自治会入るとか、組合に入中で、どうしても負担感を感じている。特に会費が高いこと。都会から来ると、大体自治会費は年に500円程度のところもあるため、いろいろと伝えながら、移住定住していただかないと、いろいろな形でネガティブな面が出てきてしまうと感じている。

【塚平市民協働環境部長】

- 移住定住を希望し、空き家を探されている方は、自然が豊かで、さらに空き家の隣には農地があり、農業をやりながら暮らしたいとする方が非常に多い。
- ある程度生活していくのに便利なところ、田舎の中にあつて里町といったような中に住むところを見つけて生活されたい方もいる。
- 空き家バンクへの登録も里山、さらには中山間から街場も含めて用意をし、対応できるような形にしたいと考えている。
- 固定観念を持つのではなく、里・街・山といったような分野があり、そこを上手に案内できるよう、希望される方に寄り添って、しっかりと情報をいただいた上で対応していくことを基本方針としてやっている。
- 飯田に初めて来て、関係者が全然いない方も多くいる。そういう方に対しては、移住の先輩が飯田にも多くいるため、移住者交流会を毎月開き、移住の先輩としっかりお話をしてもらおう中で飯田を知っていただき、さらにはご案内をする中で、見ていただいている。大事なのは、良いところだけを見ていただくのではなく、不便なところやデメリットになり得ることもしっかりと伝えること。また、地域の皆さんとより良い関係を築いていただきたいていうこと。地域の方にいかに移住してきた方々を受け入れてもらえるかも重視をし、伴走支援をしながら、移住定住政策をやっている。
- 件数的にはもっと増やしたいが、1件1件内容濃く対応をし、長く住んでいただきたいという思いで対応している。

【本田委員】

- ・リニアが来るまでに、他の都会から見て飯田がどのような街であるかを演出することにおいては、都会の方が田舎を求めているのならば、他と地域と違う田舎を演出すべきだと思う。日本全国に田舎があり、それぞれ色があるなかで、思い切って中途半端な田舎ではなく魅力ある田舎に来ることができることの演出にこだわる必要があるのではないか。
- ・品川から30分40分に乗れば、飯田市で日帰りの田舎体験ができる。学生にしても、親がすぐに子どもの顔を見に行くことができる。リニアが来るチャンスに、この地域の良さを演出する必要があると思う。「焼肉の町飯田」も一つのキーワードではあり、それだけではないことも分かっているが、交流人口と定住人口を増やすことを目指すのであれば、様々なニーズがある中からいくつか絞って、差別化、いわゆる「売り」、飯田市の「売り」をあまり大きく広げないようにする必要があると思う。
- ・公民館を中心とした交流人口や関係人口に対して優しく受け入れる地域コミュニティ、ホスピタリティある土壌、田舎が綺麗であること、お祭りがあることなどの都会の人たちを刺激する何かを演出していく必要がある。
- ・飯田を発信しているあるY o u T u b e rで、フォロワー数が50万から80万人ほどいる方が1人いるが、飯田市を宣伝するわけではなく、飯田の景色をとりながら、軽自動車に家を建てて演出している。そのY o u T u b eを見ると、飯田市の名前は一言も出ない。演出の仕方、飯田の良さを世界中の人に認めてもらっており、やり方次第だと思う。
- ・SNSを活用して飯田を発信することはまだまだしていく必要があり、飯田をどう差別化するか、他の地域と違う田舎を演出するという点に対して思い切った方向でやっていただきたい。飯田はこういう町だと一言で言えたほうがいい。

【杉山委員】

- ・焼肉のニュースで面白い取組をやっていることを見た覚えがある。一方で、焼肉だけではと感じた。もちろん他のこともPRされていると思うが、田舎らしさ飯田市らしさ、そのブランド化について、ブランディングをどこで強めていくのかを多面的に考えてもいいのではないか。もちろん焼肉はユニークで、また焼肉関係のビジネス、収入が増えるという意味では素晴らしいと思う。
- ・環境の分野では、肉の消費が環境の面から少し問題にもなっている。飯田の焼肉は配慮をしていることもPRするなど、そういうことで、プラスマイナス0にしていく配慮も今後良いのではと思った。
- ・私は飯田のイメージというとりんご、日照時間の長さによる再生可能エネルギーがある。特に、再生可能エネルギーの取組が先進的である強いイメージを持

っている。景色が綺麗で田舎なところは日本中たくさんあるため、飯田はこんな特殊なところだと、飯田らしさをもっとすごくこだわっていいのではないかと思った。

- 自治会費も、ネガティブな印象ではなくて、人との関わりがこの地域にはあることをむしろPRしていくといい。価値観が多様化しているため、全ての人が賛同することはないと思う。それはそれでいいと思う。飯田に来たら人の関わりが濃いと、そこが「売り」になってもいいのではないかと思う。
- 移住定住について、必ずしも、定住、終のすみかまでを求めなくてもいい、そういうちょっとゆるい移住でもいいと感じている。お試しのような移住ができる環境があっても面白いのではないか。
- 今後、移住定住者が増え新たな家を作るときには、ZEHのような環境配慮の家を建てるルールを飯田のルールとして作り浸透させていくことが大事だと思う。例えば、北海道のニセコ町が徹底的にエネルギー消費を抑えた環境配慮したまちのエリアを作っている。参考になるのではないかと思う。
- リニアをチャンスと捉えるという考え方には賛成する。

【福岡委員】

- V i s i t I I D Aのサイトは、すごくよく飯田市の魅力がまとめられていると思った。K P Iの指標では、基準年400件に対して令和3年では、5,669件と増えており、令和6年度の目標値1,000件に対して非常に良い数値が実績となっている。もっともっとユーザー数増やしていくことも1つの戦略としてあると思う。
- Y o u T u b eで飯田市をアピールしないY o u T u b e rというのもまた飯田市の魅力を伝える1つの方法だと思う。サイトもいいですし、様々な情報発信の方法はあるため、定住、U I ターンの前に、まずは飯田市を知ってもらう、そして来てもらうところに力入れてもいいと思う。

【森下委員】

- うちの三軒お隣に、10月に入ると移住してきてから2年経過する方がいる。引っ越してきたばかりの時には組合への加入は無理だという話だったが、今年の4月におすすめしたところ入っていただけた。どういうことでここへ引っ越してきたのかを聞いたところ、役所が近く、高校や小学校中学校が近いところを探してきたとのことだった。
- 引っ越されてきた方が、近くの木が大きくなってしまったので、それを切ってもらったが、どのようにしてごみを出したらいいかということなので、1mの束にして、2箇所縛って120円証紙を貼っていただければと説明し、4束出していただいた。

- ・近所の掃除、公園の掃除、ゴミ拾いまでしていただき、遠くから来て、そこまでやっていただける方は嬉しいと話したら、森下さんが環境で一生懸命やってみえるしと言ってくれました。ありがたい。
- ・上郷の野底山公園で先月2日間かけて焼き肉フェスタをやった。雨も降ったが、大変好評だった。遠くから来られる方はお断りさせていただき、飯田近辺の方たち約2,000人集まったと管理事務所の方にお話を聞いている。
- ・桐林にネクサスという工場がある。そこへ環境適正処理の関係のボランティアで行き、27名のブラジル人の方とグループに分かれて説明をさせていただいた。その際には、日本人の方が違反することが多いと聞いた。
- ・名古屋から派遣されてくるときに飯田市は、分別がしっかりしているから厳しいと聞いてきたとのことだった。外国の方でもしっかりやってくれるので、飯田市の皆さんもしっかりやっていただきたいと思った。
- ・飯田は実際に良いところだと思う。買い物に行くと店員さんが親切だという話を聞いたこともある。

【塚平企画部長】

- ・V i s i t I I D Aについては、飯田市内にフリーWi-Fiスポット10カ所あるが、その最初の画面をV i s i t I I D Aに設定した。そのため、ここでフリーWi-Fi繋げると、V i s i t I I D Aが最初に出るようになっているため件数が伸びた。
- ・目標の1,000件は、1年前の件数が伸びなかったことから、1,000件は行ってほしいと思い目標とした。他の町村を参考にしたわけではないが、仕掛けをしたところ大きく伸びたため、令和4年度は、目標値を変更し令和6年度の目標を4,600件にした。目標値を変更したが、最終的には令和3年度の数値が既に超えてしまったため、少し困ったという感じである。
- ・1本桜などの様々な画像を増やしたことも、閲覧件数が増えた要因の1つだと考えている。仕掛けの部分とコンテンツ良くしていくことでより増やしていきたいと思う。
- ・リアルな交流がなかなか難しいため、インターネットで、また、7カ国語8言語でやっているため有効に活用していきたい。
- ・焼肉については、11m29cmのギネス記録となる世界一長い鉄板で焼き肉という企画を行った。その時には、TVなどの露出度が高かったため、実行委員会の中でも、関東圏の友人からも電話来たという方が多くおり、知名度が上がったと思っている。その後、焼肉の自動販売機も出てきており、勢いを消していけないと思っているが、民間を主体にやるべきことであり、市とすれば、民間の皆さんがグループを作っていく際にバックアップすることを行っている。

【塚平市民協働環境部長】

- ・前向きかつ建設的で参考になるご意見をたくさんいただいた。
- ・地元の周知も地域の皆さんにってもらうことについては、20 地区田舎へ帰ろう戦略の説明の際に詳しく意見交換をさせていただきたい。
- ・他と違う田舎を演出すべきことについては、非常に大事なことで、我々としてもどうやって差別化するかは常に考えているところである。
- ・価値観の多様化によって、移住に対して全部対応する必要はないのではないかという話もいただき、再生可能エネルギーの話もいただきました。基本目標 11 において改めて話をさせていただきたい。飯田版 Z E H 仕様については、今年ようやくスタートしたところ。今後どうやって伸ばしていくかについて考えているところである。
- ・組合の中に移住者がおり、地域の皆さんがしっかりその方をフォローしていただけることは大事なことで基本だと思っている。私達の移住政策の基本にあることであるので、参考にさせていただきたい。

<基本目標3 “結いの心”に根ざす教育を実践し、豊かな心とリニア時代を生きる力を育む>

【遠山委員】

- ・私の住んでいる南信濃地区では、小中学校の存続が危ぶまれているというところが非常に地域の課題となっている。
- ・「これからの学校のあり方に関する検討」について、今後の展開方法の中で、特に子育て世代の意見を引き出していききたいとあるが、子育て世代に加えて、これから子供を持つ若い世代の意見もぜひ汲み上げていただけると非常に良いと思う。人口減少が激しい中で、子供を育てる環境ではないと思い、地域を出てしまう周りの若い方々もいるという現実があるので、ぜひそういったところの意見も組入れながら、今後の学校教育のあり方を検討いただきたい。

【三浦弥生委員】

- ・読書体験、図書館の活動について、子供の発達段階に応じてご対応しっかりいただいていると感じる。乳児そして4歳児の子供たちへの絵本という、言葉というものへの取っ掛かりの部分からの対応や、ICTというものだけではなく、読書といったところで、高校生の読書や図書館の活用ということも考えていただいて、ムトスぷらざの中央図書館駅前分室も設置していただいているというところは本当ありがたいと思う。
- ・「発達段階に応じた読書体験の充実」において、高校生の図書館や読書に対するニーズを把握し、それに対応した取組を進める必要があるという課題認識は、全くその通りだと思う。それに加えて、ニーズを把握して望むものだけではなく、高校生の皆さんたちが集中力を要して読む、チャレンジできるような本に興味を持ってもらえるような工夫もぜひいただきたい。好きな分野の本だけではなく、様々な分野の本を読んでいけるような取組をまた考えていただきたい

【松下教育委員会参与】

- ・この取組については、令和3年度から本格的に学校運営協議会で、これからの学校における特色ある学びをどのように進めていったらいいのかということと、学校の配置・枠組みをどのように考えていったらいいのかという二つのテーマを持って、協議をいただいた。昨年度の学校運営協議会での議論の中でも、年代によって考え方が異なるという傾向があった。学校運営協議会の中にPTAの役員の方が参画をし、ご意見をいただいているが、PTAの皆さんの中からも子育て世代の意見を特に引き出して考えてほしいというご意見をいただいている。専門アドバイザーの何人かの大学教授の先生方からも、やはりそういったところを、大切な視点において検討を進めていくべきだろうというアドバイスをいただいている。
- ・そういった意味で、本年度、学校運営協議会を中心とする検討を重ねて、小中学校の保護者の方々とできれば保育園幼稚園の保護者の皆さんを対象にして、特色というものをどのように考えていったらいいのかということと、それについてどういう学校の環境がいいのかという、これらを主なテーマとしたアンケート調査を実施し、その結果をこれからの検討の重要な参考材料としていこうということで、今検討を進めている。
- ・それに加えて、地域的にはそういった世代の皆さんを含めた懇談会も設定をした方がいいのではないかというご意見をいただいている。そういったところも検討に加えながら、遠山委員さんからいただいたような世代の皆さんの意見を反映した検討を進めていきたいと思っている。

【松下教育委員会参与】

- ・高校生の読書について、先日、飯田下伊那全ての高校の図書委員の皆さんにムトスぷらざの中央図書館駅前分室をご覧いただいて、読書をテーマにした取組ができるのかディスカッションをさせていただいた。
- ・高校生が特に推薦をしたい本を選んで、その本の紹介をイラスト等も含めて、パネルで紹介するという取組も行った。徐々にここに高校生を対象とする図書館機能が出来てきているということが周知されてきているので、さらに広げていきたい。
- ・特にご意見をいただいた集中力を高めて読み込むということや、あるいは今年から高校の学習指導要領の中でも位置づけられた探究学習、本を選定して読み込んで探究を深めていくという取組も、開設当初からの中心的なテーマとしている。まだまだこれからの課題という認識をしているが、そういう取組もぜひいろんなご意見をいただきながら進めていきたい。試行的な取組だが、

い。それが読解力の向上にもつながっていくようにも感じた。

- ICT教育を進める上で、ICTそのものを使うことが目的ではなく、より良い学習成果が得られる一つのツールとして活用するというポイントを押さえているのは本当にありがたいことだと思う。そういった中で、子供たちと毎日長い時間接していただいている先生方の本当にご努力があって、そういった良い活用の仕方につながっていると思う。先生方が力をつけることができる、またそういった環境の整理というところで、先生方には新しいことを学んでいただいて、それを教育現場で生かしていただく。そういった時間を無理なく確保できる飯田市の教育体制になると良いと思った。

【永井委員】

- 読書に関しては本当に私も同感だが、ただムトスぷらざの中央図書館の分館機能というのは、拝見してなかなか面白いと思うが、逆に、中央図書館の今まであったヤングアダルトのコーナーの蔵書が少なくなってしまった。あそこを利用していたのは、高校生だけではなく、小学生高学年や中学生、また大人も利用していたので、少し残念だなと思う。
- 読書というところでは、高校生の棚を見ていると、さらに読書を深めることによって、YouTubeやインターネットの記事を見ても、これは本当なのかといった自分の意見や気持ち想いを持てるようになると思う。確かに発達段階に応じていろいろ対策していただいているのは本当にいいと思う。「おともだち絵本」は年中児だが、その後続くように小学生の低学年向けの冊子を配ったりされているのでいいと思うが、それが高校生まで連続して続くように皆さんでそういった棚やいろんな働きかけをすることが大事だと思った。
- わが家の結いタイムについて、少し取組が難しい状況だということだったが、コロナ禍で、子供が学校に行けないとか、家にいなければならない状況があったと思うが、わが家の結いタイムの取組というのは、良い家庭生活を送るヒントが盛り込まれていると思うので、その辺を考えて実践してもらえれば逆にチャンスでもあったのではないかと思った。お手伝いすとか、読書体験とか、家庭での対話というのは、親御さんが子供に関心を持って、何考えているのか何したいのかなというふうに話をするというようなことだったと思うが、そういったわが家の結いタイムの取組について少し残念だと思った。

【石神委員】

- 評価指標KPIで、不登校が小中学生に少し多い。「自分に良いところがあると思いますか。」に対する回答結果は△が多い。特に小学校高学年、中学校あたりの不登校の要因の一つに、授業がつまらないということで不登校になってい

高校生の皆さんの読書習慣作りに働きかけをしていくということと、探究的な学び、集中力を高めて読み込むという取組を進めていきたい。

- ICTの取組については、昨年までは各学校に中核教員の先生方を配置し、その先生を中心とした研修や働きかけをしている。本年度からは中核教員の先生にも中心になっていただくが、他の先生方も各授業の中で有効に使っていただくための、普及や活用を一つのテーマとしている。体制的にも2人の現任教員の方と教員OBの方を選任体制として、日々各学校を回って、いろんな取組への案内やサポートをしている。また学びが深まる有効な使い方について通信を作成し、月2回程度各学校へ配布をしており、先ほど三浦委員さんが言われた取組を進めつつあるという段階である。

【松下教育委員会参与】

- 読書推進の取組については、まだまだ課題は多いが、新しい取組も含めて進みつつある段階かなと思っている。特にここ数年、学校の司書と、中央図書館を中心とする行政司書の連携がかなり密に進んできている。各学年の推奨図書もそうだが、学校図書館、公共図書館、飯田市の特徴である分館における取組、高校生においては各学校の図書委員や司書の先生と連携したムトスぷらざの中央図書館駅前分室での取組など、この連携ということの一つのテーマにした取組を進めていくことで、今ようやくそういう取組の緒に就いたところなので、これからさらに進めていきたい。
- 高校生については、飯田市の特徴である読書会や読み聞かせみたいなのところも、高校生の取組の中の一つのきっかけ作りになる可能性があると思っているので、試行的な提案をしながらさらに進めていくことができるのではないかと考えている。
- わが家の結いタイムは、コロナ禍で取組としてはほとんどできてないという状況があり、大きく反省をしている。むしろこういう状況の中でやるべき課題ではあったのではないのかというご意見をいただいても当然という認識をしている。あいさつ、会話、読書、お手伝いを柱にしているが、マンネリ化しているのではないのかといったことや、家庭における取組について、行政が道徳的なことを言うのはいかがなものかというご意見をいただく場面もあるが、基本的な取組として、ぜひ家庭でのご理解をいただきながら進めていくということ、これからまた組立てし直して、進めていきたい。

【松下教育委員会参与】

- 飯田市の義務教育課程において、今おっしゃっていただいたような観点の中での検討研究を十分にしていない状況にある。今ICTを活用した学びが定着しつつある中で、授業時間内に習得が早い子と、そうでない子の進度の差が

る。あるいは不登校しないまでも、潜在的に不登校になっている。つまり学校に行っても授業は聞いてない。友達がいるから行く。そういう子供たちがいる。平均を中心とした教育が通常行われていると思うが、進度別の教育がこれから日本で非常に重要な課題になってくると思う。非常に進んでいる子は授業も教科書を全部読んでしまっている。2、3年先の事が頭に入っていて、特に小学校高学年中学校あたりの理数系で平均を中心とした教育されると実につまらないという子がいる。これは、頭の中で実質不登校。例えば欧米でよく言われているギフテッド教育。要するに、どんどん伸ばす教育。実質的に不登校の子もどんどんついていく。逆に能力というよりかはそういう性格でゆっくりやりたいという子もいる。こういう子はゆっくりやればいい。平均というのは分布しているため、大なり小なり必ずあるはず。飯田の教育というのは非常にこれから重要なモデルの地域だと思うが、そこでやっぱりこの進度別ということも少しこれから考えていくということもありなのかなど。飯田の特色というのは10万都市であること。つまり、小学校中学校も選択できない。たまたま僕がいるところの小学校は7割が私立校へ進学している。大都市では選べるが、飯田は選べない。そこで選べないならば、学校で進度別ができないか。ゆっくりやるのもある種の個性なので、遅れているとかそういう意味ではなく。特別支援というのは遅れている子になんとなく目がいつてしまうが、みんな差がある。差を認める教育というのは、飯田でできないか。

【石神委員】

- これからずいぶんこういう課題が増えてくる。特に外国人がこれから増えてきたり、都会からの移住も増える。そういう場合に、いろんな差異、違いが出てくる。そこを認める教育をしないと。ギフテッド教育もこれから文部科学省が考えようという話になっているようだ。日本の中で、平均化するよりは常にグローバルを見ている。こういう中ではやっぱり差異というのは非常に重要。遅れているという概念ではなく、差異。これは飯田が率先してこういう方向を打ち出していくと、非常に意義があると思った。

【三浦弥生委員】

- 「放課後児童クラブの受入れ体制の整備」について、今後の展開方法の中で、飯田女子短期大学の名前を挙げていただいている。地域にある短期大学として養護教諭の教育実習で、飯田市の小・中学校に15名から20名の学生が、実習に行くといった環境を与えていただいている。その他にも食育に大事な栄養教諭や幼稚園教諭の教員養成をしている。そういったことを目指す学生たちがいる。そういった学生たちも人材として取り入れていただくということはとてもありがたいと思う。学生にとっては、地域の中でそういったことを学ぶ環境も与え

できるので、習得進度の早いお子さんたちについては、通常の先生の授業の中で習得をしてしまった後には、ICTを活用して次の予習的なことをやるというような取組がようやく始まっているという段階である。特にこれからリニア時代を迎える時に、学校のあり方も大きな変革が起こる可能性があると考えており、特に学力を追求した場合には、定期を使って、名古屋や、東京の私立の中学校に通うというような選択も、現に今松本に通っているお子さんもいるが、そういう選択も出てくるということになる。そういう環境変化の中で学力の進度別教育というところをどんなふうに考えるのか。また、学力だけではなく、例えば象徴的なのはキャリア教育。ふるさとへの誇りや愛着を抱いて、ふるさとに心の根を張って、必ずしもこの地域に住み続けるということではなく、この地域に心の根をしっかりと張って外で活躍をしたり、この地域の担い手、支え手となって生きていく、そういう子供たちをしっかりと教育の中で育てるといふ、こういった軸もこれからの学校教育のあり方としては求められると思う。そういったところを総合的に捉えた時に、飯田市のこれからの学校のあり方の軸をどんなふうに置いていくのか、特色をどんなふうに考えていくのかという議論は、必要なことだと認識している。

【松下教育委員会参与】

- 飯田女子短期大学については、来年から男女共学化され飯田短期大学となる。毎年、介護、看護、保育の地域の貴重なエッセンシャルワーカー的な役割を担う人材を輩出して、定着してきていただいているということで、そういったところとの連携した取組というのはこれから一層必要だと思っている。キャリア教育の中でも幼保小中高というところも連続的、系統的な取組を進めていきたいと思っているが、飯田短期大学に就学される皆さん方への働くところまで続くキャリア教育の取組も次年度あたりから進めていきたいという思い

ていただけるといことになるので、ぜひこういったところに本学の学生たちと一緒に入れていただきたいと思う。

【熊谷委員】

- ・不登校のことで、上村小学校の場合は飯田市から通っていただいて運営をしているという小規模特認校だが、小学校では元気に通っていた子供が、中学校へ行った途端に不登校になってしまったということをよく聞いた。先ほど石神委員が言われたように、ゆっくりやりたいというも子もいるかもしれないが、馴染めなかったのかなと思っている。高校へ入った途端に不登校が無くなったというようなこともあり、子供の心理というのはどういうものか分からないが。

【小林委員】

- ・ICT推進というところで、たくさん実験ができるような形で進めていただければいいと思った。その理由としては、個に寄り添った教育の推進というところで、個別にどこまで進めていくかというところでかなり難しさも出てくると思う。ICTというのは、そういうところでも絶対に必要になってくる部分だと思うので、子供たち、教える側、関わる人たちもこのICTの部分に精通していく必要があると思った。なかなか数値化が難しかったり、KPIの設定も

を持っているため、そういった点でもぜひ意見交換等させていただければと思っています。

【松下教育委員会参与】

- ・不登校の児童生徒の皆さんとその原因については一口には言えない複雑な原因が絡まり合っている。先ほど石神委員からおっしゃっていただいたように、今不登校は特別なことではないと文部科学省の方針として打ち出しがされた中で、積極的に学校に通うことを選択しないという親御さんも出てきつつあるので、そういう中で不登校の捉えというのは一層難しくなっている。そういうお子さんたちへの支援をどのようにしていくのかということでは非常に大きな課題だと思っている。今飯田市の教育委員会がやろうとしているのは、多様な居場所が必要だろうということで、今までは行政のくくりの中で、保健室、学校、中間教室だけでやろうとしていたが、今、民間でいろんな体験活動をしたり、学習支援活動する多様な居場所を作っていただいている事業者の方々かなりの数いるので、そういった皆さんと連携をしながら、その子に合った、例えば自立のきっかけをつかめる居場所、しっかりと一定程度の学びができる居場所、そういう多様な居場所を作っていくということも進めていきたいと考えている。そうしたことから、ムトスぶらざにビーイングを設けて、今、民間事業者の方々との連携を強めて、まさにこれからご案内をしていこうとしている。
- ・中学校時代に不登校の生徒が飯田OIDE長姫高校の定時制へ就学されたり、通信を選択されるケースが多いが、不登校で定時制に入られた方で実際に退学をされる方は毎年ごく少人数で、多くの生徒さんたちは、同じ体験してきた友人とコミュニケーションをとったり、赤裸々にいろんな語り合いをする中で、何かしら自立のきっかけをつかまれるということ、体験発表会では目の当たりにする。何かそういう取組の中に不登校の皆さんへの自立のきっかけをつかむための支援のあり方というものがあるのではないかとということで、今定時制との連携も強めてそういったところの取組について検討していきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・不登校や特別な支援を必要とするお子さんたちの個に寄り添った学びの中でも、当初からICTを活用した学びというのを試行してきたが、一定の効果があるということは実証されてきている。先ほど石神委員がおっしゃったような進度別教育の視点とは若干違うが、特別な支援を必要とするお子さんたちにも有効な活用をするという方法もあるので、それらを含めてさらにICTの有効な使い方、上手な使い方、効果的な使い方というのを追求しながら推進

難しい部分だと思うので、いろんな実験ができて多少柔軟に動けるような戦略にしていくのもいいと思った。

【石神委員】

- やっぱり共通する部分は必ずあるはずで、いわゆる感性や人格的なもの、他人との関係性、思いやり、こういうものは共通している。共通したベースの上に、技能的、技術的や性格に応じた進度、これは差がある。基本的に二つ考えるべきで、一番のベースは飯田の一番大事な特色ある人間教育、昔からの飯田下伊那の自由教育が一番大事で、その上で更に今度はICTを使う。ICTは技能的に非常に個別対応できる可能性があり、これは差異をつけていい。これを共通でやってしまうと逆に人格の方もおかしくなってしまう可能性がある。基本的なところは人間教育をちゃんとやった上で、違いを認める教育が飯田のこれからの特色になるのかなと感じた。

していきたい。

- 2024年にはデジタル教科書の選択導入という大きな課題を控えている。これから一層教育現場でのICT活用というのは大きな流れになってくる。それに応じた取組と同時に、ICTを活用した学習の中では、おろそかになったり、低下しがちな、例えば実体験を伴っている皆さんとFace to faceで関わり合って、様々な体験をしながら五感で学び取っていくという学びの重要性や、あるいは本を通じて、それを読み解いて、内容を理解して、その内容を活用して、さらに考えていくという、まさに読解力を高めていくというようなことは、ICTの取組の推進をすればするほど、一方ではそれを意識的に進めるという軸も必要なため、そういった点も含めて、これからの義務教育課程での学びというものを考えながら進めていくということが必要だという認識をしている。

【松下教育委員会参与】

- 今お話しいただいた構造的な整理というのは、大変重要な視点だと思った。人間教育と技能ベースの教育というのを並立的に捉えるのではなくて、まず基本として人間教育があって、その上に個に応じた技能教育があるという構造的な捉えをしっかりとしていくということが必要だと思った。改めてそういった認識を持ちながら進めていきたい。

＜基本目標4 豊かな「学びの土壌」を活かした「学習と交流」を進め、飯田の自治を担い、可能性を広げられる人材を育む＞

【三浦弥生委員】

- ・社会教育の分野についてはしっかり取り組んでいただいていると感じている。
- ・菱田春草没後110年の特別展のように、大人はもちろん子供たちも美術博物館に足を運んで実際の作品を観られたことは、本当に価値あるものだと思う。
- ・春草生誕地公園や柏心寺にある春草のお墓などを巡ることができる地図や、春草通りとして整備された仲ノ町の道など、地域住民が学べるような環境等の整備にしっかり取り組んでおり、市が社会教育の推進に尽力していると感じる。
- ・平和祈念館についても、今の世界情勢において平和について考えるきっかけとなる場が、どの世代も集まれるムトスぷらざにあることは効果的であると思う。

【石神委員】

- ・基本目標4に係る取組は飯田市の強みであると思っている。コロナ禍により指標での評価がしにくいのが、市としての課題意識はどこにあるのかお聞きしたい。
- ・また飯田市の強みであると思う反面、どのぐらい強いものなのか実はよくわからない。市としてはどのような評価をしているのか。

【松下教育委員会参与】

- ・春草をテーマとした取組については、特に橋北地区の皆さんに公園の日常的な管理をしていただいたり、ガイドをしていただいたり、様々な形で活用していただいている。
- ・行政は基本的に地域資源の価値を顕在化させるために、文化財指定やハード整備に取り組むことが中心になる。
- ・春草の作品の芸術性を伝えていくのは当然だが、子供たちに春草の生き方からこれからの時代を生きるヒントを学んでほしい。文明開化で西洋文化へのあこがれが強かった明治時代に、周りから批判されつつもあえて伝統的な日本画の技法に西欧的なものを積極的に取り入れながら、新たな画法を編み出して、新しい日本画というものを確立していった春草の発想や生き方は、先行きが不透明な今の時代を生きていく上でも重要ではないかと思う。そういったことを子供たちに伝え学びにつながる取組を進めていく。
- ・春草の生誕日と没日のある9月を春草マンスリーとして、生誕地など春草にゆかりのある地をガイドの方のお話を聞きながら歩くといった取組もしている。
- ・平和記念館については、より良い展示をしていきたいということで、高校生及び短大生を中心に現在35名が人権平和ゼミに参加いただき、全9回の連続講座をムトスぷらざで行っている。平和とは何か、多文化共生とは何か、実現のために自分たちには何ができるのか考え、学びを深めていただいている。そういう取組も含めてより良い展示につなげていきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・飯田市の強みは、決して行政主導ではなく住民の皆さんの自主自立的な取組が進められていることである。行政はあくまでコーディネーターとしてそういう取組の下支えをしている。
- ・飯田市の社会教育機関である公民館における活動においては、地区公民館だけでも、約900人、分館も含めると3000人ぐらいの公民館委員の皆さんによって様々な事業が企画運営されている。その中でその地域の課題や生活課題を捉えた学習事業が組まれていく。公民館主事は、その過程において組織化のお手伝いや、学びを展開させるためのお手伝いをするという支援者の立場として働いている。住民の皆さんの自治力が飯田市の一番の強みであると思う。
- ・例えば地域資源の保存継承活用については、多くの自治体においては文化財指定して、公的に整備して守っていくという手法が採られているが、飯田市で

は地域の皆さんが今の時代を生きる者として、地域資源の意義や価値を明らかにしながら、それを伝えるための取組をされている。

- ・一方で、10年20年先を見たときに、その自治力がこのままずっと維持されていくのかということについては課題であると捉えている。若年世代が地域の課題と向き合った取組として、高校生を中心として探究学習が展開されている。高校生が地域の人と関わりながら地域で学ぶという取組を、各高校で試行していただいている。逆にその高校生の皆さんから地域の皆さんが刺激を受けて、改めて地域の良さや課題を捉えて、一緒に行動に移していくという動きが起きつつある。そういう若い世代の自治的な取組が多様に創発されていくことがこれからの地域にとって大切と考える。
- ・ムトスぶらざが若い世代をターゲットとしているのも、若い世代の皆さんによる活動に大人が刺激されて市民活動が活性化されることをねらいの一つとしている。

【松下教育委員会参与】

- ・例えば飯田OIDE長姫高校における地域人教育では、公民館主事がコーディネートをしながら、高校生が地域の皆さんとともに、その地域の課題解決のために活動している。地域の学びと高校生の学びが同時に実現されているこういった相互学習の取組を大事にしながら、高校を卒業した後の若年世代の皆さんが、どういう形で地域課題に向き合っていたか、いろんな取組に繋げていくかという点については大きな課題だと思っており、ムトスぶらざを起点にして取り組んでいきたい。
- ・ムトスぶらざでは公民館が中核となって行政が関わるという形にしているため、ムトスぶらざにおける取組が公民館を介して各地域へ波及していくという流れも作っていきたいと考えている。
- ・高校生の探究学習が学習指導要領の中に位置付けられている。飯田市では地域をフィールドとして探求学習が展開できるということを高校へ案内して、高校生を中心とした若い方が地域の中に入って学ぶということを大事にした。

【松下教育委員会参与】

- ・一時期途絶えたが、再開して再興するという経過をたどってきた祭りもある。よって、行政が最低限しなければならないのは記録である。映像記録や祭りの所作などを全て記録に残していくということが、万が一途絶えたとしても再興できるための重要な取組であり、美術博物館で進めている。
- ・祭りについては神事という性格上、氏子の皆さんのお祭りとしての伝統を大切にするという考えもあれば、氏子ではない方の参加も受け入れた形態に変

【石神委員】

- ・ムトスぶらざは中心市街地にあるが、中心市街地ではない地域の公民館活動における若い人の活動の状況はどうか。

【遠山委員】

- ・私が南信濃地区出身ということもあり、霜月祭りの話をさせていただきたい。地域における高齢化が進んでおり、霜月祭りの継承がかなり厳しくなっている。先日もある地区の霜月祭りをいったん休止したいという意見があったようで、若い世代がどう継続させるか検討しているという話がある。
- ・行政としても祭りのような地域の伝統行事に積極的に関わるのが難しい部分があるという話を聞いているが、できるだけ寄り添っていただければ地域の—

員としては嬉しいと思っている。

- ・愛知県東栄町の花祭や天龍村の祭りなど、三遠南信を中心とした伝統的な湯立神楽のお祭りは、非常にその形が似通っていて、ルーツがおそらく同じなんだろうと言われている。三遠南信の連携を、文化的な側面でも強く進めていただきたいと思っている。
- ・お祭りをどう継承していくかっていうところに注力している中で、少し俯瞰的に見て、同じような課題を抱えているすぐ近くの地域との横の繋がりが生まれるようなきっかけづくりについて、行政だからこそできることを少し考えていただきたいと思う。

【小林委員】

- ・飯田青年会議所の事業に多くの中高校生ボランティアが参加してくれる。今後も市としてボランティア活動の推進に取り組んでほしい。
- ・青年会議所においても三遠南信の交流があり、昨年浜松市の高校で、三市それぞれの高校生が自分の地域の魅力を発信し合うという授業があった。高校生同士の交流を軸とした新しい地域の魅力の発信方法だと感じた。

【熊谷委員】

- ・上村地区も高齢化が進んでおり、霜月祭りに関して担い手、後継者が不足している。中止する地区もあると聞いている。今後も継続して市の支援を期待するところである。
- ・コロナ禍で2年間霜月祭りを開催できなかった地域もあり、若者へ伝える機会が無かった。祭り自体も縮小して開催せざるを得ず、段々と形が変わってしまうのではないかという心配もある。

【永井委員】

- ・上郷考古博物館に、どれだけの飯田市民が行ったことがあるのだろうか。とても工夫された展示はしてあるが、小中学生は学校の授業として行くことがあっても、大人はほとんど行くことがないのではないかと考えている。
- ・貴重な物が展示してあるので、恒川官衙遺跡に関する展示物と組合わせて、もっと興味を引く展示ができるとよい。
- ・鼎地区の組合でも高齢化の問題があったりそもそも組合に入らない方が多い。組合も持続可能な形に変えないといけない。子供たちの見守り活動といった住民同士の支え合いがこの先継続できるのかとても心配している。

えられている霜月祭りもある。行政からアドバイスできない部分であるため、地域の皆さんの話合いの中でどういう継承のあり方がいいのか考えていただく。

- ・今田人形については、龍江地区住民に限らず意欲のある方を早くから積極的に受け入れて、そのうえで活動拠点は龍江地区に置いて継承している。そういった保存継承形態も、新しい時代において有効な手段の一つであると思う。
- ・祭り街道は、三遠南信の連携における重要な取組の一つだが、そこから具体的な取組につながらなければ意味がないため、地域が連携した保存継承の動きをしっかりと作っていくための形を改めて考えたい。

【松下教育委員会参与】

- ・三遠南信の交流は今まで中学生交流という形で中心に行ってきたが、やはり高校生も交流する中で、自分の住む地域を俯瞰的に見て特徴や課題を知ることがある。そういう意味においても三遠南信の交流を高校生へ広げていく必要性を感じた。

【松下教育委員会参与】

- ・霜月祭りの保存継承については、次世代の皆さんへの伝承も含めて地域の皆さんと一緒にその課題を共有して取組を共にしていきたいと思っている。行政としてももう少し何かできることがあると思っているので、そういうところのご意見もお寄せいただきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・恒川官衙遺跡については、再来年を目処にガイダンス施設を整備したいと考えている。
- ・上郷考古博物館は飯田市考古博物館に名称変更したが、大和王権との密接な繋がりの中で、当時の日本の国作りに大きく役割を果たした飯田を証明する飯田古墳群の価値をしっかりと伝える取組や、古墳のある市内5地区の地域の方と連携した活用の取組もしっかりと進めていく。
- ・今の時代は、60代の多くの方が働いており、地域活動に傾注・専念できる方がどんどん少なくなっている。地域活動において特定の方に負担が集中するのではなく、みんなでシェアし合いながらできる活動のあり方や組織のあり方を考えていく必要があると思っている。

<基本目標5 文化・スポーツを通じて人と地域の輝き・うるおいをつくる>

【遠山委員】

- ・全市型スポーツスクールや部活動の地域移行は面白い取組だなと思った。私が学生の頃にはなかった取組なので、ぜひ進めていただきたいと思っている。
- ・例えば南信濃地区のような中山間地域においては、子供たちが通うスイミングやボルダリングなどスポーツスクールへの送り迎えを、親が仕事終わりや、土日に行っているという話を聞く。子供たちのスポーツ活動においては、親がいかに協力できるかという課題があると思う。
- ・子供たちがやりたいスポーツを自由にできるという環境が整っていることが一番大事だと思うので、こういった取組は今後も継続していただきたい。

【三浦弥生委員】

- ・感性も体力も伸びていく中学生期において、多様なスポーツに触れることで、生涯にわたってスポーツを楽しむことができる心と体を養うことができたらいいと感じている。スポーツ障害を起こすことなく、健全にスポーツを楽しむために、専門の大学機関等も入って取り組むことは大事だと思う。
- ・生徒や保護者、地域が共通認識を持って、一緒に取り組んでいけたらよいと感じる。
- ・飯田市は面積が広い。距離的な問題や経済的な問題により、子供たちのスポーツ環境に地域格差が生まれやすい、市民も一丸となって考えていけたらよいと思う。
- ・人形劇の町を世界に向けてPRして、市民も飯田の人形劇に誇りを持って楽しめるとういと思う。

【石神委員】

- ・文化は伝統的なものが継承されていくこともあるが、創造するものでもある。新たな文化を作っていくことについてどのように考えているか。

【熊谷委員】

- ・風越登山マラソンがコロナ禍で中止にならないことを願っている。

【松下教育委員会参与】

- ・飯田市スポーツ協会さんと連携して出前教室という仕組みを作り、昨年遠山地域でバドミントンの教室を行った。こういう取組を試行しながら、子供たちにとってのスポーツ環境をどう整えていくのか検討したい。

【松下教育委員会参与】

- ・中学生期におけるスポーツ環境の整備に向けて、どういう状態になることを目指して何をしていくのかという共通認識を持ち、市民の皆さんの役割、組織活動をされている皆さんの役割、行政の役割が繋がりが合い、一つの目的に向かって協働して取り組んでいくことが基本軸だと思う。
- ・ご指摘をいただいた二つの取組については、しっかりと共通認識と協働できる関係性を作りながら、しっかりと地域に定着するように進めていきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・例えば美術博物館では、小中学生対象の美術教室を継続的に行っている。
- ・オーケストラや合唱、演劇、人形劇など飯田市の特徴的な文化というものが行われているが、それが次の世代でも同じような形で創造されるかというと、必ずしもそうではなく、例えばダンスのように新たな広がりを見せている部分もある。
- ・新文化会館の整備に向けて、市民ワークショップの立ち上げを目指している。これからの文化の創造に向けて、若年世代の皆さんに集まっていただき、この地域でどういう文化活動を創造・展開していけるのかなど、自由に語り合う場を作りたい。

【松下教育委員会参与】

- ・風越登山マラソンには既に多くの応募をいただいております、今年はぜひやり切

・マラソンに取り組む人たちのためのトレーニング施設などを設置してもらえないか。

【永井委員】

・若い時にいろいろな経験ができるのはとても良いことだと思うので、一つに限らず、様々な音楽や、演劇、運動ができると良い。

りたい。飯田市スポーツ協会でもロードレースの企画実施をされているため、行政としてもこの取組を支援したい。

・皆さんのニーズに応えられるような取組を関係組織と一緒に考え、実施していきたい。

【松下教育委員会参与】

・これもスポーツ文化関係の団体組織と連携をしながら、そういう機会を作り出していきたい。

＜基本目標6 結婚・出産・子育ての希望をかなえる＞

【勝野委員】

- ・全般的な話になるが、重点的に取り組んだものや新規の取組などはあるか。

【菅沼委員】

- ・仕事と子育ての両立は難しい課題であると認識しており、企業としても努力しなければならないことである。育児休暇は原則1年間で、そこから6か月の延長、さらに特殊事情に応じて6か月、最長2年間取得できるが、例えば1年間で職場復帰しようとする、0歳児で慣らし保育に預けるといったニーズが出てくる。未満児保育において、2歳児の受け入れ枠は増え、0歳児や1歳児の枠はあまり増えていない印象を持っている。企業においても人材不足という課題を抱える中で、0歳児及び1歳児の未満児保育へのニーズに応えられる保育サービスが期待されるが、これについてどう考えるか。

【佐々木委員】

- ・未満児保育に関して、コロナ禍でさらに深刻化している保育士の人材確保について、民間園に対してもしっかりと支援することが重要であると思う。
- ・佐藤市長が公約としても掲げている児童クラブの6年生までの受け入れは、実現に向けてしっかり取り組んでほしいと思っている。

【中田委員】

- ・母子保健コーディネーターはどのような人が担っているのか。
- ・子育て応援アプリがどれくらい活用されているのか、ダウンロード件数は何件あったか。
- ・育児休暇について市役所の男性職員の取得状況はどうか。男性が育児休暇を取得することについて、法律上何の問題もないのでまずは市役所の方から進めてほしいと思う。

【高山健康福祉部長】

- ・「出産の希望を叶える」ということについては注力してきた。例えば不妊治療の取組については、支援の対象を拡充してきた。また、子育てにおける親の孤立、子の孤立を解消するため、アプリを導入し、親だけでなく祖父母などを含めた家族全体で、子供の育ちを喜ぶことができる環境づくりに取り組んだことは新たなものである。

【高山健康福祉部長】

- ・飯田市では現在、2歳児の保育ニーズが激増しており、ご指摘の通り、未満児保育における0歳児及び1歳児についても、その割合が今後増加すると予想している。一方で、出生数は年々減少しているため、未満児保育のニーズは女性の早期就労という側面では増加し、少子化という側面では減少するという状況であり、総じて未満児保育の児童数は減少すると分析している。ただし、これからは就労者の個別ニーズに合わせた保育サービスの提供を考えていくべきだと考えている。

【高山健康福祉部長】

- ・コロナ禍にあって保育士の人材確保は非常に悩ましい課題である。人材確保については自治体間競争の様相を呈しており、飯田市も苦労している。飯田市の戦略としては、豊かな自然を活用した子育てやまほいくなど、飯田市独自の子育て環境に魅力を感じていただき、共感いただいた保育関係者を呼び込むことが大事だと考えている。魅力の情報発信を行うとともに、人材コーディネーターを配置する取組も行っている。

【高山健康福祉部長】

- ・保健師が担っている。市役所本庁舎にコーディネーターを配置し、母子保健に関することを総合的に案内できる体制を整えている。また、市内20地区に配置されている地区担当保健師と密に連携を取り、必要に応じて産婦人科とも連携して、母子に対して総合的なサポートを展開できるように取り組んでいる。
- ・昨年導入したが、確認して後ほどお答えする。(令和4年3月までのダウンロード数が1,216件であることを事務局より補足)
- ・配偶者の出産休暇といった短期的な休暇の取得は広がっている印象があるが、それに比べると育児休暇はあまり浸透していない。今後の課題として大事なことだと思っている。

【勝野委員】

- ・結婚しない方が増えてきているという実感がある。また、基本目標評価シートのKPIで「産みやすいまちだと思ふ人の割合」が約40%で、「育てやすいまちだと思ふ人の割合」が約70%という数値の乖離が気になりである。育てやすいが産みにくいという風に見えるが、ここについてどう考えているか。

【山上委員】

- ・社会福祉協議会としても男女の出会いの場づくりに取り組んでいるが、コロナ禍で厳しい状況が続いている。リモートなどの手段を活用して行政とも協力しながら取りんでいきたい。
- ・社協の相談窓口にひとり親の来客が多い。ひとり親であっても安心して生活が送れるような取組を行政と共に考えていきたい。

【藤本委員】

- ・出生率の低下は人口減少に直結し、そうするとまちづくりの観点においては役員のなり手不足、空き家の増加等につながり、最終的にコミュニティの崩壊につながる。豊かな自然や地域資源を活用して、たくましい心と体、自己肯定感と協調性を育むいだ型自然保育の魅力を発信していく。これは良い取組なので進めてほしい。
- ・慢性的な保育士不足の解決に向けて具体的な対策を立てていただきたい。例えば定年退職した保育士を活用するとか、具体的な取組を示していただきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・市内の分娩施設を備える病院が減少し、現在は市立病院のみである。その減少に比例して、「産みやすいまちだと思ふ人の割合」も減少してきたという傾向を掴んでいる。一方で助産施設は増えてきており、そういった情報を届けることが重要だと思っている。

【高山健康福祉部長】

- ・保育補助員や保育支援員といった保育士の資格は持っていないが、保育現場の補助をしていただける方を増やす取組を進めている。昨年度はその研修に41名の受講があった。

<基本目標7 「市民総健康」と「生涯現役」をめざす>

【中田委員】

- ・通いの場とはどういったものなのか具体的に教えてほしい。

【勝野委員】

- ・長野県ACEプロジェクトでは、「健康長寿世界一の信州」という風に謳っている。いいだ未来デザイン2028には「日本一」とか「世界一」といった文言は見当たらない。

【菅沼委員】

- ・コロナ禍における健康講座などの様々なオンラインでの取組について、参加者からの反応はどうだったか。
- ・取組によってオンラインの向き不向きがあるため、コロナ禍の2年間のノウハウを生かして行ってほしい。

【山上委員】

- ・フレイル予防について、家にこもるのではなくまずは外に出ることが重要であると思っている。通いの場づくりのような各地区における地域が主体の介護予防の取組が重要である。

【藤本委員】

- ・私は建設国保に加入しているが、昨年保険料が大幅に引き上げられた。この流れは国保も例外ではないと思う。特定検診等の受診率を上げていただき、病気になること自体を減少させるような取組を期待する。

【高山健康福祉部長】

- ・原則後期高齢者である75歳以上の方をターゲットにした介護予防のための取組の一つである。通いの場をきっかけにして、参加者同士の新たなコミュニティが形成されることも狙いとしている。

【高山健康福祉部長】

- ・昨年度も確かに同じ趣旨のご意見をいただいた。このぐらいの気構えで取り組んでほしいというメッセージとして受け止める。

【高山健康福祉部長】

- ・参加者同士の情報共有やコミュニケーションがオンラインではなかなか難しく、参加者からも同様の意見があった。できることとできないことがどうしても出てくるので、まずは絶やすことなく継続して行っていきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・ご指摘の通りである。若いうちから健康に気を付けられるように、意識啓発の取組をしっかり行いたい。

＜基本目標8 共に支え合い、自ら行動する地域福祉を充実させる＞

【中田委員】

- ・地域福祉コーディネーターとは、どういう方がなれるのか。
- ・専門なのか手当はどのようになっているのか。

【山上委員】

- ・社会福祉協議会の職員が地区担当という形で、その地区の活動支援、相談を受けるなどしている。資格については、社会福祉士と社会福祉主事の有資格者を配置しているが、中には福祉経験者で研修を受けた者が担当している場合もある。コーディネーターについては、配置されたら1年間通じて県の社協が実施しているコーディネーター研修を受けていただき、地域で活動していただいている。

【勝野委員】

- ・福祉まるごと相談窓口は、困り事があった場合には、どんな困り事でも、持っていけば、何か対応してもらえるセクションなのか。

【藤本委員】

- ・地域福祉コーディネーターの役割がとても大切だということを認識した。地域での調整役となって、先進的な取組を共有化し、主体的な実践活動の創出に繋がっているとのことだが、どのような形で横の繋がりを実現しようとしているのか。
- ・市内20地区に対して福祉コーディネーターが9人という体制で十分なのか。
- ・資料中、有償化在宅福祉サービスの実績が0だが、事業を行ったが地区で取り入れられなかったのか、それとも何もしなかったのか。

【山上委員】

- ・地域福祉活動研修会を毎年開催しており、そこには各地区の健康福祉委員にお

【高山健康福祉部長】

- ・社会福祉協議会の職員が担っている。
- ・地域コーディネーターは社協の職員として給与が支払われているが、市が委託をしている業務であるため、委託料がその財源になっている。

【高山健康福祉部長】

- ・福祉相談に関して、具体的にこのサービスを受けたいと言って市役所に見える方は少ない。何をすればよいのかわからず、福祉制度も大変細かく窓口が細分化されていて、どこに行ってもいいかわからないという方がいらっしゃる。
- ・市側からすると、ファーストインテークという格好になるが、まずは重層的支援係がお話を聞かせていただく。必要とする支援が、福祉や教育、医療、経済的なものといった多岐にわたったとしても、相談を受けた職員が必ずその分野のサービスへ繋げるところまで行う。
- ・令和3年度から開始したが、コロナ禍において、失業したとか、店を開いても客が来ない、濃厚接触者になり食料や子供のオムツを調達できないなど、感染症に関するご相談がほとんどだった。

集まりいただき、情報共有をしながら、他地区の取組を参考にさせていただくことで活動の横展開を図っている。

- ・地域福祉活動計画にはいろいろな地区の特徴的な事例を掲載しており、各地区の健康福祉委員へ紹介と説明をしている。また活動についての学習会を行っている地区もある。
- ・有償化在宅福祉サービスについては、全く行っていないということではなく、取組としては実現していないが検討している地区もある。空欄であることが何もしていないように見えてしまうかもしれないが、地区でもご検討いただいている。
- ・なお、有償在宅福祉サービスは、立ち上げ支援という名目で、地区でサービスを立ち上げようと検討を開始した際における、助成事業である。

【勝野委員】

- ・組合の加入率が下がってきているような状態である。福祉は住民のボランティアによって支えられている側面があり、組合の加入率の低下は、地域の福祉力の低下を招いてしまうことが懸念される。
- ・また、昔に比べて個人主義の時代になっており、従来と同じような地域福祉の取組をしても成り立たなくなるのではないか。何か新しい地域福祉のモデルが必要になるかと思うが、何か考えはあるか。

【佐々木委員】

- ・地域福祉力が低下してきている中においても、ご近所同士が助け合う場面は多々あると感じている。一方で、プライバシーの問題などにより、地域の福祉委員の方には相談しづらいという方がいたり、組合に入っていない人同士が助け合っていたり、若い人たちが高齢者の介護をしているという話も聞く。そういった、支えているがその事実があまり周りから見えにくいといったケースへの具体的な支援や、支えている人のための相談窓口がかなり求められている時代だと感じる。
- ・ある方から、「相談窓口がどこなのかわからない状態で市役所に行ったが、すべて相談を受けてくれて、関係窓口に繋いでくれた」という話を聞いた。その方

【高山健康福祉部長】

- ・組合加入の低下については、福祉の分野に限らず地域の防災という面でも、課題となると思う。組合加入率の低下については基本目標9でしっかりとご議論をいただく。
- ・福祉ニーズのある方を、地域の皆さんが支えるということは非常に重要である。地域の皆さんの支え合いながら地域の中で共に生き共に暮らすということ大事だと思う。
- ・それぞれの地域においても高齢化が進んでおり、1世帯の家族数が二人や単身という世帯が多くなってきて、福祉面での家族の力や地域そのものも脆弱化してきていると捉えている。
- ・住民同士の支え合いだけではなく、地域にある事業所やNPOといった法人も「地域を構成する人」として地域を支えている状態が、これから目指す地域共生社会の姿であると考えている。こういった社会の実現に向けて取組を進めていきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・既存の福祉サービスや地域の支え合いによる支援が行き届いていない方に対して、どうやったら手を差し伸べることができるかということは、非常に大事な視点だと考えている。また、支えている人がこれ以上続けると自分の限界を超えてしまうその前に支援を引き受けることが、行政の役割であると認識している。これらのことは今後の施策を組み立てるにあたって、十分配慮してまいりたい。大変に大事なご指摘として持ち帰る。
- ・まるごと相談窓口については、確かに認知度がまだ低いと認識しているため、これからしっかりと取り組んでいきたい。

は福祉まるごと相談窓口の存在は知らなかったようなので、市としても情報発信してこの窓口をPRしてほしい。

【中田委員】

- ・福祉まるごと相談窓口はとても良い取組だと思う。私のように親元から離れて暮らしている人間としては、親の身に何かあった時にまず相談できる窓口があると安心なので、そういった方からの相談も増えると思う。
- ・私の知り合いや友人で飯田に毎週通っている人がいる。介護など福祉サービスの現場にそういう外部の人たちを、上手に巻き込んでいくことができればよいと思った。

【山上委員】

- ・地域包括支援センターでは、ご家族に代わって高齢者の方のようすの確認や、必要な支援に繋げるといった相談支援に取り組んでいる。気楽にご連絡いただきたいと思う。相談窓口自体の情報発信にも取り組んでまいりたい。

【菅沼委員】

- ・障がい者の社会参加の推進について、課題認識の部分で、地域住民が障がい者について正しく理解し地域の中で考えていくことが必要としているのはまさにその通りだと思う。
- ・今後の展開についても、そういった取組を具体的にどういった形で発信をしていくのか整理し、なるべく目立つような発信をしていただきたい。障がいのある方や、手助けが必要な方、どうサポートしたらいいかわからないから助けられないという人も中にはいる。
- ・組合加入の話があったが、地域社会の関係性が希薄になっている中で、なるべく目立つような発信やアピールが必要だと思うが、何か考えがあれば教えていただきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・一人暮らしや高齢夫婦のご家庭については、高齢者台帳をもとに、民生児童委員が訪問して状況を把握している。また、家族の連絡先やかかりつけ医の電話番号などが書いてある紙を入れた筒を、必ず冷蔵庫のドアポケットに入れてもらっている。そのご家庭に何か問題があった時、近所の方はそれを見て連絡ができるという仕掛けがある。
- ・地域包括支援センターにおいても、そういったご家庭へ伺って、介護予防や健康維持のためのアドバイス、消費者問題、詐欺防止などについて、お話をするという取組をしている。この取組は、ご本人の同意をいただいたうえで、本人のようすや生活状況について把握するためのものでもある。

【高山健康福祉部長】

- ・障がい者福祉や障がいへの理解に向けた取組については、正直弱かったと思う。そこは振り返らないといけないと思っている。
- ・障がいそのものが多様なため、例えば車椅子のことがわかったからといって、耳の不自由な方の暮らし方がわかるかということ、そういうものでもない。一緒にご飯を食べてみたり、一緒に話をしてみることで、耳の不自由な方にどうやって話せばいいのか、手話ができなくても紙に書いたり、身振り手振りで伝える、といったことがわかる。要は障がい者と接点があることで、サポートの方法が見えることになる。
- ・どういう支援をしたらいいか学ぶことも確かに大事だが、自分の隣に暮らしている障がい者のことを理解するには、まずは接点を持つことが大事である。障がい者が100人いれば100通りの支援ニーズあるため、まずはそのことを理解するためのきっかけづくりが必要だと考えている。
- ・そのきっかけの一つとして、「心がほっと温まるユニバーサルデザイン」の特集記事を広報いだに掲載した。ご家族等でユニバーサルデザインとは何だろうと話題にさせていただくための取組である。
- ・障がい者と人たちと我々は実は同じ空気を吸って同じ地面の上で暮らしているんだということを少し認識するだけで、だいぶ理解が変わってくると思う。

知ってもらったり学ぶ場が大事で、市では「知る」ことについての取組から始めたため、まずはこれをしっかり進めてまいりたい。

<基本目標9 20地区が輝く生き活きとした地域づくりを地域主体に進める>

【杉山委員】

- ・飯田市では、地域活動が活発であることが非常に優れた点だと思われる。この点において、コロナ禍にあっても何か良いことはあったか。

【下平委員】

- ・新型コロナウイルス感染症の影響は一定程度出てくるが、その中でも、地域は地域で、コロナ禍でもできることをどのように取り組んでいくかを検討している。例えば、公民館活動の文化祭や市民運動会では、距離を取る、時間を短縮する、参加人員を縮小することを基本に、できることを皆さんで考えてやっていく。文化祭では、できるだけ混み合わないよう一方通行にし、流れを作り実施をした。
- ・いろんな方法を、良い知恵を出し合うことは、いい効果が出ているのではないかと思う。
- ・自治活動組織の加入率を上げることはなかなか難しい。ネガティブな面もあり、また、新しく飯田に移住された方の情報がなかなか取れないということもある。飯田市の協力を得て、移住されてきた情報をいただきながらそれぞれの区の皆様にお話し、勧誘活動を進めているところである。
- ・それに伴い経費もかかるが、市でいただくお金にプラスとして自治会費をいただきながら、できるだけ加入していただくように頑張っている、難しいところはあるが、決してそこはネガティブではなくてポジティブに取り組んでいる。

【塚平市民協働環境部長】

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大より前から、それぞれの地域が人口減少に悩んでおり、まちづくり活動においても役員のなり手不足や自治組織への加入低下といったことが恒常的な課題となっている。
- ・その解決策をそれぞれの地区において模索していたことがまず根底にある。コロナ禍で、事業が中止・延期とすることが日常的に行われ、地域の繋がりやまとまりにおいて地区ごとに苦労してきた。
- ・一方で、そういったことを経験したことにより、令和4年度に入り、中止になった事業をそのままやめるのではなく、コロナ禍でもどういった活動ができるか、新型コロナウイルス感染症に対応しつつも、地域の絆、繋がりを取り戻すための取組をどうすればできるかを各地区が工夫を凝らして考えている。単純に中止・延期という選択肢をできるだけ排除しつつ、どうすればイベントが実施、事業が実施できるか。さらに地域の組織についてやり方をどうすればいいか、加速度的に検討が進んだということがある。
- ・まちづくり連絡会議でも、ここ2年ほど、組織改革、事業の見直しを集中的に検討し、それぞれの地域で工夫を凝らしている部分を情報共有、情報交換する中で、ほかの地域への展開を図れるよう情報共有を行っている。ただ単に人口減少に伴ってどうするかだけではなく、コロナ禍を契機に、より効果的にできるかを検討できていることは、メリットと言える。

【福岡委員】

- 日本の人口は減少傾向になると思う。それは大きな予測で、ほぼ確実な予測というふうに言われており、人口動態は絶対確実である。この地域も漏れなく少子高齢化が今後も進んでいく。
- 環境の視点からすると、地球温暖化という大きな課題がある。それに伴って気候の激甚化、災害を日々感じているところだと思う。台風も多くなり、洪水のリスクもある。地震も加わって、気候というものが一層厳しくなってくる将来予測がある。
- そういった中で、中山間地域などリスクの高い地域がある。私の知人に、阿智の山間地の非常に奥のところに住んでいる方がいて、住むとなるとそこまで電気を通さなければいけない・水道も引かなければいけない。そこに住んでいる限りは、供給する責任が発生する。このテーマを見ると移住にすぐフォーカスされていて、空き家の活用がテーマにも入っているが、1つの視点として、今住んでいる方を、いかに将来予測の中で、コミュニティを維持させてあげるか、そういった離れたところではなくて、できるだけコミュニティを集めるような形で維持運営できないか。今住んでいる方をどうするかの視点もぜひ加えてもいいと思いつながりを見せていただいた。

【三浦宏子委員】

- 20地区の問題はすごく難しい問題だと思う。飯田は、小さな村々が合併してきたため、これを1つとして考えていくことがすごく大変なことだと、ここ20年で感じている。その人たちの希望を受けつつどうしていくかは、リニアより難問かもしれないなと思っている。
- コロナ禍において思ったことは、昔の人たちは何かの災害のときにお祭りをして、支えてきたことをすごく感じる。一番先にお祭りが、住民の人たちのまとまりを築いてきたと、この飯田市の文化を見ていて思う。地区のお祭りがすごく重要であり、地区ごとで花火が上がる。きおいはしなくても花火は上げる。このことはすごく飯田市の特徴である。飯田市の全部の花火を1回にまとめて東京のような花火をあげたらいいのではないかと、すごく立派な花火が上がると思うが、それはできない。やはりお宮とかお祭り、そういったものが地域で支え合っていく20地区になるのかと。これはすごく難しい問題であると思う。

【本田委員】

- 20地区がそれぞれに優先順位決めて、環境の問題や地域にある従来の活動において、我々の地域では、この2、3年はこの問題だけを重点にやるとすることでいいのではないかと思う。
- 公民館やまちづくり委員会には、たくさん仕事がある。それを幅広く全てをこ

なしてやることよりも、当地区においてはこれを重点的にやるとする目標を絞った方が、それぞれの地域の特性を作っていけるのではないかと思う。

- ・山間地区には山間地区の問題もあり、中心市街地含めて5地区の方には5地区の問題がある。これとこれはとりあえず今まちづくり委員会でやるとすることを、達成するだけでも、チャレンジするだけでも意味があると感じる。

【森下委員】

- ・書面にて提出する。

【塚平市民協働環境部長】

- ・それぞれのお知恵をいただいたものと捉えさせていただく。
- ・地域コミュニティをどう維持するかが非常に大事だということについては、私達もそれぞれの地域が基本構想、基本計画の実現に向けて取り組んでいる部分をしっかりと支援をし、優先順位、何からまずやればいいのかの選定についても、しっかりと支援をしながら一緒に取り組んでいきたいと思う。
- ・コミュニティ維持の視点からのお祭りについては、この飯伊地区はお祭りが盛んであり、どこの地区でもお祭りが行われ、さらには花火のこともあり、地域コミュニティを維持する1つの大きな成果になっていると思っている。
- ・地球温暖化気候変動の拡大については、基本目標11のときに、またしっかりと議論ができればと思う。

<基本目標10 個性を尊重し、多様な価値観を認め合い、活動の場を広げる>**【本田委員】**

- ・駅前の中トスぷらざが整備され、飯田国際交流推進協会事務局も中に常駐するようになった。飯田市には、2,000名以上の約2%の外国人の方がおり、日ごろから地域の皆様に、ご理解をいただき、支えていただき感謝している。
- ・中トスぷらざにおいて、外国人の交流の場、それぞれの文化の発信、在留、交流外国人、在飯外国人の生活に関する様々な問題を少しでも解決できるよう取り組んでいる。
- ・飯田市は、人形劇フェスタであるとか、長年にわたる国際交流の歴史があり、地域においても支えていただいている。
- ・「創発」という言葉が、中トスぷらざのカギになっており、それぞれが、それぞれに集まり、摩擦や影響し合っって次の可能性を見つけ合う場。新しい可能性、エネルギーまたは活動が生まれる場所になることが大きな目標である。
- ・地域の学生、高校生も積極的に中トスぷらざに参加していただいている。それこそ中トスの実現に向かってよろしくお願いをしたい。
- ・やさしい日本語という言葉がある。少しわかりづらいと思うが、例えば、日本だと「拝啓、皆様、日頃は飯田市政府につきまして深いご理解をいただきありがとうございます」と始まる。外国人からすると、理解するまで時間がかかる。ですから、「運動会が何月何日あります。何と何を持ってきてください」くらいの言葉にすること。「つきましては」「ご理解をいただきますよう」「日頃の感謝」などはいらない。ストレートに言っていただくのが一番わかりやすい。そういったことを含めて、やさしい日本語。ぜひとも皆様のご理解をいただきたいと思う。

【三浦宏子委員】

- ・中トス飯田の助成事業について、自分たちで考えて実行しようとするものに対して、5万円の助成をしたらどうかという話があり、今年度からチャレンジ助成という新たな形がスタートした。今までの助成金は30万円で、多くの審査を経て行うものだったが、高校生でも一般の方でも気楽にいろんなことを起こしてみよう。まずやってみよう。チャレンジしてみようっていう形の企画が立ち上がって実行されてきている。そういうものをたくさん使っていただき、中トスぷらざに来てもらって、活性化できるといい。
- ・中トスぷらざに来て、いろんなことをチャレンジするきっかけになればいいと思うが、来ない方も多分にいる。飯田市は、丘の上だけじゃなく、20地区にまたがっているため、中トスぷらざで発信している情報が、いろんな地区に広がって、まちづくりにつなげていくことができるといい。
- ・高校生たちの活動も徐々に広がりを見せているので、広い範囲に広がっていく

といいと考えている。

【下平委員】

- ・ムトス助成金について、新しく制度も変わり、使いやすくなってきたと感じる。
- ・近年と比較して、増えているのか減っているのか。
- ・第1次募集、第2次募集など数回の募集を行っている。そのことが、市民に浸透しているのか心配なところがある。
- ・有効に使えば有効な仕事ができる。ムトスぶらぎに集まる人は、市民全体と比べると少ない。しっかりと啓発して、市民一人一人、地域住民の一人一人が分かって活用できる仕組みにしていけないと、有効に活用されないのではないかと。

【福岡委員】

- ・PTA活動や地域活動、特に地域と子どもの接点が薄くなってきている。新型コロナウイルス感染症の影響が大きいと感じている。どうしたらいいのか答えは簡単には出ないと思うが、大きな課題認識をしている。
- ・女性の社会進出、社会での活躍については、企業の立場からも課題を感じており、弊社も女性従業員が少ない。特に管理職や役職者の女性の割合が増えない。
- ・無理に人を増やせばいいわけではないと思うが、もっと頑張りたい方に活躍できる場をもっと提供できるようにしていく必要がある。
- ・広い意味だと、昔は一つの会社に長く、一つの業務を仕事とする形の働き方だったが、働き方自体も多様化している。働き方も含めた様々な活動で、活躍できる場所をつくっていくことが、個性を尊重することに繋がると思う。

【杉山委員】

- ・飯田市は様々な取組を展開している印象があり、他の地域と比べ進んでいると思う。
- ・女性の比率で、審議会・委員会での女性の委員の比率に比べ、住民自治活動組織や市役所の係長相当の職責における女性の比率は達成がもう一息。理由をどのように分析しているか。また、女性委員の比率の目標は30%だが、今後、引き上げる予定はあるか。
- ・地域のハザードマップなど、本当に重要な情報についての外国語の対応はどのようにしているか。

【塚平市民協働環境部長】

- ・今年度ムトスぶらぎに事務所を移して事業を移管したところ。
- ・今年から年に1回の応募ではなくて、年に4回という間口を広げる取組を実施した。現在2回応募締め切りを迎え、既に一般の助成が27件、若者のチャレンジが3件である。10月末にもう一度締め切りがあり、既に問合せが来ているため、例年の数字を超えることは間違いない。
- ・今年度から小口の助成として、チャレンジ助成をスタートした。既に昨日時点で13件の応募があり、実施されている。
- ・PRの必要性については、すごく大事なことであり、試行錯誤をしながら続けているところである。

【塚平市民協働環境部長】

- ・数値としては、これでも上がってきたところ。女性の方が多く働いているが、家庭の事情も当然あり、管理職についても、家庭のことや子育てのことを考えることで、自ら手を挙げづらい状況がこれまでにはあった。男性の家事の協力や育児の協力、さらに男性の育休の取得促進により、女性と男性が家庭について協働することで、女性が仕事に集中し、さらに上を目指していただく環境作り、風土作りに力を入れて取組んできた。
- ・少しずつ係長を目指す女性が増えてきている状況。管理職にいる者が、女性に管理職を担いたいと思ってもらえる雰囲気づくりをすることも大事だと考えている。
- ・まちづくり委員会については、地区ごとの事情があり、地区の選出の方法に課題がある。単に回り番で選出するだけでは、男性が役員になる傾向があるた

- め、選出方法には、できるだけ女性の方を推薦していただく環境づくりが必要である。
- ・まちづくり委員会全体の組織改革が地区ごとで進んでいる。全体の人数は減らしつつ、女性に参画をしていただく地区が増えてきており、今後も増えていくと思う。
 - ・外国語のハザードマップは、現時点では作成予定がないということで、今のところ対応していない。

【本田委員】

- ・ハザードマップの話を補足すると、国際交流推進協会でも検討している。過去には、多言語に対応した問診表を作った経過がある。
- ・災害時のハザードマップ、避難経路、案内を作らなければいけないということで、今年度と来年度の事業でWEBサイトを立ち上げようとしている。その中に多言語での案内を載せていけたらと思う。
- ・日本には、地震で逃げろというマークにナマズの絵を書いたピクトサインがある。外国人から見ると分からない。ナマズと地震がつながるのは日本人だけ。そのナマズの写真の横に避難経路が書いてあるが、外国人の方にはまず意味がわからない。やさしい日本語ではないが、ピクトサイン、ハザードマップ、災害のときの対応の仕方に関しては、行政の方々と協力してやっていきたいと思う。
- ・飯田市は、ゴミの出し方に関しては多言語対応したものがある。

【杉山委員】

- ・今のハザードマップの話は聞いてよかった。例えば作る予定がないとしても、お子さんや、地域の皆さんと一緒に作っていくことをしてもいい。その方が地域の情報が吸い上げられ、住んでいる皆さんが再認識することもでき、また外国人との交流にもなるかもしれない。
- ・女性の比率について、非常に頑張っているという意味で発言と質問をさせていただいた。経験をされた方が、「私もやっとうこういうふうにできたわよ」「あなたもやってみなさいよ」といった形で増えていくのではないかと思われるので、ぜひ応援したい。

【森下委員】

- ・女性委員の話については、各8班まであるうちの地区ではブロック制にして、そこから各部署へ女性は何名と指定しているため、女性の方にたくさん参加していただいている。
- ・学校と地元住民との繋がりについては、ゴミを拾いながら学校の先生と一緒に

なって話をしながら地域を勉強していく見守りボランティアがある。子どもたちは熱心で、「僕たちを呼んでくれればいつでも応援しますよ」と言ってくれる子どももいる。まちづくりでも、最近は女性の委員さんが多くなってきて、親しく話もでき、男女に関わらず、お互いにうまくやっていけば、話合いながらやっていきたい。みんなが手を組んでやるのが、大きいこと。

【塚平市民協働環境部長】

- ・ご質問とは別に、ご意見とご感想をいただいた。いただいた意見を参考にしながらこれからの業務に繋げていきたい。
- ・ムトスぷらざの活用は、しっかりと皆さんに来ていただける政策を数多く実施し、まずはどんな人がいるかを見ていただくことで、新しい交流が生まれることもある。情報発信をしっかりとしていきたいと思う。
- ・ムトスぷらざは、まだ開所して数ヶ月。今年度は試行錯誤しながら効果的な活用に向けてしっかりまとめられるようやっていきたい。

<基本目標11 地球環境への配慮が当たり前の暮らしとまちづくりの推進>**【本田委員】**

- ・私みたいな60歳過ぎた者が、なかなかエシカルなことを心掛けるには大変厳しい現実があるが、「将来の子どもたちのために」というキーワード、実はもう自分たちのためじゃなく、子どもたちのために責任の取れる大人にならなければいけないという言葉が、この計画の中に入っているといい。
- ・若い人に任せればいいのかとするのではなく、自分で責任取れよということで、60過ぎのこれから、一生懸命責任を取らしていただくという覚悟。未来の子どもたち、今の若い子どもたちのために、一生懸命、地球環境やエシカルな気持ちを持って取り組むとする言葉をぜひ入れていただきたい。

【下平委員】

- ・地域の生活現場は、不法投棄が結構いまだにあり、非常に困難を極めている。
- ・ごみも資源と捉えて、購買活動していくのがいいのではないかと。ペットボトルでも何でも持っていけばお金に変えられる仕組みを作っていくと、なかなか不法投棄も減らない。
- ・同時に、生産する側も最後まで責任を持つ。拡大生産者責任を法律化していくことも重要なことではないかと思う。法規制も含めて、飯田市だけではできなくて、県や国に繋げていく課題だと思う。
- ・地域の環境委員の負担軽減について、ゴミ集積場に立ち番など、いろいろやっているところもあればフリーなところもある。飯田市全体をフリーにしてもいいのではないかと。時間で立ち番をしても、それ以外の時間でごみを出される方もいる。そうすると何の意味もない。役員の負担軽減の面からも、検討いただきたい。

【森下委員】

- ・本当にルールが守られておらず、一つの袋に全部入れて出してくる。燃やすゴミ袋の真ん中に缶を入れて、瓶を入れる。その周りに燃えるゴミを入れて出す人もいる。ごみ収集車が来て、すぐ分かって警告のシールを貼っていく。1週間なり10日なり置いておくとなくなっている。本来は、ごみを出した人が誰なのか分かったら、その人へ言いたいけれど、なかなか言えない。頭を悩ましている。

【三浦宏子委員】

- ・環境の問題について、子どもたちに託すわけではないが、現実には私たちがこの難しい言葉を聞いて理解できるかと言われると、なかなかできない。
- ・子どものときから、学校などで教育していただくと、知らず知らずに身に付き

ていく。

- 男女共同参画も同様に、子どものうちに教育していくと身に付いていく。地域活動の中で、20年前はお母さんが子どもを連れてきていた。今はお父さんが連れてきて、日曜日に子どもが遊ぶのがすごく多くなっている。時代とともにそのときに子どもたちを教育していくことが、将来を作っていくことに繋がるとすごく感じる。
- 現実に、ゴミを分別せずに出している方もいる。それは出したくて出しているわけではなくて、分別がわからない方が多いこともあると思う。実際の行動パターンを明記するとか、わかりやすい言葉でどうしたらいいのかを広報してもらうことが、歳の大きな私達に向けてできることではないか。
- 子どもたちに向けては、教育を続けてもらいたい。私達のような人に対しては、新しいことってなかなか吸収できないし、環境問題はすごく横文字の言葉が出てくるため分からない。わかりやすい言葉で理解できるよう表現して指導していくことが大事だと思う。
- 分別について、飯田市はすごいと言われる。東京は全部一緒に何でも捨てられる。面倒だとも言えるが、やはりそれだけ飯田市は環境に配慮した行政を行っているのだと感じる。

【福岡委員】

- リニア駅周辺や今後のことを見据えると、モデル地域を作っていくことはいい取組だなと思う。飯田版ZEHの普及も議論され、プラットフォームもできたのだなと思って見させていただき、非常に良い取組ができていると思う。
- 緩和策が中心になっているが、特に防災は重視しなければいけないと考える。例えば、2050年を目標に掲げ取り組んでいるが、なかなか2050年の世界で太陽光が次の技術として残っているかわからないし、今の技術革新からすると、2050年の世の中を想像できない。
- しかし、防災は、実は結構予想できる部分があり、甚大な水害、台風、それに伴う土砂災害といったものは、結構予測ができる。
- 喫緊の課題は都市計画だと強く思っている。特にレッドゾーン。弊社の子会社でも、水害の可能性が非常に高い地域に工場があり、防災対策を喫緊の事業課題に位置づけて取組を進めている。
- そういったところに今、家が建てられる状態。この都市計画をぜひ検討し、将来を見据えた都市計画を考えていくことが喫緊の課題としてある。
- 最近、みどりの食料システム法という新法の方が施行された。農林水産省の方で施行された法律。
- 具体的には、農業の関係って人口減、高齢化、地球温暖化が課題になっている中で、化学肥料しか入手ができない問題や農薬も非常に強い農薬を使っている

ため、こうした化学肥料や農薬の使用が少ない自然農業、有機農業を広めていくこと。

- ・農業人口を補うためのロボット化や、それに伴ってゼロエミッション、CO₂を出さないような農業、持続可能な農業を目指そうという非常に斬新的な法律。
- ・次の見直しのタイミングで、こういった新しい法律を踏まえた地域作りも必要な視点だと思う。

【杉山委員】

- ・温暖化の部分については非常に難しい。でもコロナ禍や、ロシアのウクライナ侵攻による燃料高騰などがあり、これまでと同じことが通用しなくなっている。
- ・これまでやってきた温暖化対策のアプローチではなく、新しいルールを作り、社会のシステムを変えていく。そういう端境期に来ていると思う。
- ・例えば、みんなで電気をこまめに消して電気料、電気代、電気を節約するのではなく、LEDに変えて、消費電力を減らし長持ちさせる。そういう新しい技術を入れること。それから、寒くて暖房を入れたいけれど、電気がもったいないから我慢するのではなく、断熱をしっかりした家にして暖かく過ごす。
- ・技術はある程度出てきている。あとは飯田のルールを作っていく。これから新しく建てる家はもうZEHのみとするくらいのルールを。しかし、それは建てる側の負担にするのではなく、ゼロ金利のローンを地銀の人たちと作るとか、節約できた分のエネルギー代で返済していけるルールを作るとか。新しい家には必ず太陽光パネルが付けるとか、そういうルール化をしていかないと変わらない。
- ・東京都も、そういうことを条例に入れてやり始めている。数年後には全国に広がっていく。
- ・これまでも、飯田市がトップで多くのことをしてきて、経験があり、全国的に環境先進都市と知られてくるところとなっている。ここはぜひ、新たな一步を踏み出して、新しいシステム作り、飯田ルール作りを積極的にやっていただきたい。
- ・社会を変え、システムを変えることで得するのは私達。早く取り組まないといけない。仕組みを作ることに賛成をする応援団をたくさん作るための環境教育をしないといけないと思う。
- ・新しいルールが作れば、わからない人もそのルールに従っていけば、環境に優しい行動がとれることに繋がっていく。
- ・気候変動への適応については、おそらく防災以外にもいろいろな分野に出てくる。適応の部分大きく項目立てるのがいいのではないかな。適応対策とCO₂

を減らす取組をつなげる仕組みを考えていくと良いと思う。

【塚平市民協働環境部長】

- ・環境教育含めて、また、環境文化都市を含めたこれからの飯田市の取組については、多くの意見をいただき、実際にどういう実践をしていくかについて具体的な話もいただいた。取組は早速行いたいと思う。いただいた意見を部内でしっかりと共有し、それぞれ検討しながら対応していきたい。
- ・いただいた意見はしっかりとその対応を担当部署に繋げ、できるところから取り組む。
- ・ゴミの関係で、意見をいただいた。不法投棄の話、ペットボトルの回収の話、ゴミ集積所の話、ルールを守ってくれない話などについて、環境課で具体的に考え、対応していくが、基本的に分別を守っていただくのが飯田市のルール。引き続き、粘り強くPR・広報を行っていきたい。

＜基本目標12 災害や社会リスクに備え、社会基盤を強化し、地域防災力の向上を図る＞

【筧委員】

- ・新聞報道等見ていると、災害がとでも多くなってきている。特に都市部だけではなく、いわゆる川沿いだとか山沿いで宅地乱開発による災害が、実は71%占めている。飯田市は、乱開発に対する制限はあるのか。
- ・川路のモデルケースは、もっと宣伝してもらいたい。

【森竹委員】

- ・災害時に備えて各家庭で井戸を掘ることやブロック塀を補強することに補助金はできるのかと聞かれたことがある。市役所のWEBサイトを見れば書いてあるのではないかと思ったが、実際にどこを見ればいいのか分からなかった。結局、市議に聞いたということがあった。各家庭の防災意識の中で、塀の改修や井戸掘りをやりたい人もいる。各家庭向けの防災に対する補助金制度がWEBサイトを見ても分からない。まとめて掲載していただくとありがたい。

【中村委員】

- ・地域の皆さんを災害時に誘導する役割としての消防団は素晴らしい組織だと思っている。
- ・私自身も松川町で分団長をやった経験があり、消防団はなぜこんなにも人が入らないかを議論していた。
- ・一番が大きい理由が操法であり、みんなで操法を辞める運動をしたが、30年以上経ってもまだ操法をやっている。消防団員と話をすると、操法さえなければ本当に地域の皆さんが気楽に月に1回程度集まって、ホースで水を出す訓練をするだけでいい。そうすれば、みんな消防団員になるのではないかとやっている。
- ・どうして消防団は操法訓練がやめられないのかと思うがいかがか。

【青山委員】

- ・災害時の避難情報の伝達手段について、防災行政無線や安全・安心メール、ツイッター等の手段があるが、人間は耳で聞くよりも目で見た方が行動に移しやすいことを考えると、家にあるタブレットの画面に自動的に情報が表示される

【田中危機管理部長】

- ・飯田市の土地開発における規制は結構しっかりしているところがある。例えば建物に対する高さ制限。第1号開発に対しては、それぞれの地域におけるまちづくり会議の意見を尊重することなど、割と厳しくやっていると聞いている。
- ・過去に開発されたところの危険度については、しっかりと調査していく必要があると認識しているが、今後開発される部分については、厳しくやっていると思う。

【田中危機管理部長】

- ・ブロック塀に対して、補助金を出して補強又は撤去していただくことは市でもやっている。補助金は今年度までの予定であったが、制度を知られていないこともあり、延長していくことを検討している状況である。ご自身のブロック塀が危険かどうか知られていない、分かれていないことがあり、そのことも含めて、もっと周知をしていかなければいけない。
- ・補助金などの制度があることを市民の方に知っていただくことは非常に重要なことだと思う。防災に対して補助金が出ることなどは、WEBサイトや広報などで周知する必要がある。

【田中危機管理部長】

- ・操法を辞めたいとする意見を多くいただいております。特に最近多くなってきている。操法の訓練が非常に重荷になっていることについて、団員の方、そのご家族からも意見をいただいている。
- ・南信では辰野町が操法の大会に参加しないことを決めた。
- ・操法の訓練を通じて、規律や団としての組織統制を醸成するというのも大事であるし、災害時に実際に動けるための基本的な動きを習得することに特化した訓練をすることも重要だと考えている。
- ・消防団の今後のあり方に関わる話であるため、しっかりと議論をしながら、より多くの団員が入っていただけるような方向性を検討してまいりたい。

【田中危機管理部長】

- ・これまで様々な情報伝達手段の整備に取り組んできた。ご意見いただいた目に見える形での情報伝達手段のアイデアも参考にさせていただきたい。

など、視覚に訴える手段の整備を進めた方が良いと思う。

【北山委員】

- 実際の災害時は、ご近所同士の助け合いなどアナログな手法が有効な場合がある。また、スマートフォンでの電話は混線してしまって、ガラパゴス携帯よりもつながりにくくなってしまっていると聞いたことがある。各地域に災害時でも使用できる電話回線を整備するといった取組も有益だと思いがいかか。

【箕委員】

- 原因は様々であるが、空き家となった家屋から出火するという事例がある。例えば空き家を市で買い上げて、ムトスぷらざのようなフリースペースとして市民が利用できるように整備すれば、まち全体の活性化にもなるしシャッター街というマイナスイメージも払しょくでき、防災の観点からも良い取組になると思う。

【竹内委員】

- この地域は、近年全国的にみられる台風や豪雨による大規模災害に見舞われておらず、非常に恵まれた地域であると感じている。この数年はコロナ禍により、防災訓練等が思うように実施できていない中で、実際に災害が起こった時のための備えで取り組まれていることについて伺いたい。

【森竹委員】

- 防災訓練に参加する若年層が少ない。実際の災害時には若い方の力が頼りになる。若い方にどれだけ多く参加してもらうかが課題である。
- 先日の静岡市の豪雨災害においては、生活に必要な水の確保が問題となっている

【田中危機管理部長】

- 携帯電話はスマートフォンが主流の時代となっているが、高齢者の中には携帯電話自体を持っていない方もおられる。市ではレッドゾーンにお住まいの方に避難情報等をお伝えする手段として、地域の連絡網を活用し伝達訓練等も行っている。
- また、衛星回線を利用した電話が整備されているため、災害対策本部から各地域へ連絡を取る手段はある。災害時でも使用できる電話を市民へ配布することについては、費用面でのハードルがあると思うが、ご意見として伺う。

【田中危機管理部長】

- 空き家については、ご指摘の通り出火の危険性もあるし、犯罪の温床となり得るため、防火防犯の観点から、空き家を減らしていくことは重要だと考えている。
- 空き家をリノベーションして活用することは地域の活性化にもつながる。この分野は産業経済部長からご説明願いたい。

【申原産業経済部長】

- 空き家対策については、市は補助事業を実施している。例えば、市民が空き家を借りて公共的な機能を果たすような活用をする場合に、賃借料や初期投資の一部を補助している。そういった制度をしっかりと周知して進めていきたい。

【田中危機管理部長】

- 災害から命を守るために、訓練は非常に重要で、かつ何回も繰り返して行うことで、実際の災害時にどう行動すればよいか理解できる。
- ただご指摘の通り、コロナ禍において地震総合防災訓練は3年間実施できていないことについては危機感を持っている。
- 災害時は各地区の自主防災組織による避難所の開設といった動きが非常に重要となる。組織を構成する役員が任期により交代しても、問題なく災害対応ができる仕組みや取組を検討している。

【田中危機管理部長】

- 防災訓練への若者の参加が少ないことについては、ご指摘の通りで市もそのように認識している。若い方が訓練に自主的に参加していただくようになるためには、小中学生期での防災教育が重要であると認識している。必要に応じ

た。水の確保について飯田市ではどのような対応を考えているか。

て小中学校へ出向き、防災に関する講演などを行っている。

- ・飯田市で最も多くの家庭に水を供給している妙琴浄水場の更新整備に取り組んでいる。また他の自治体と協定を結び、給水車の派遣を要請できるように体制を整えている。各家庭においても1週間程度は必要な水を確保していただくよう、啓発にも取り組んでいる。

<基本目標13 リニア・三遠南信時代を支える都市基盤を整備する>

【竹内委員】

- ・気になっているのは二次交通構築の部分。現時点での取組は、情報収集と検討であるかと思う。すぐに形になるようなものではないため、非常に苦慮されていることかと思うが、具体的な動きがあればお聞かせいただきたい。
- ・デジタル化の推進について、飯田市ではデジタル推進課という新しい課を設けてそれに取り組んでいるが、例えば住民票のコンビニ交付といったような新たな動きがあればお聞かせいただきたい。

【青山委員】

- ・デジタル化の推進について、民間企業では学び直すことを指す「リスキリング」を積極的に行っている。企業ではデジタル化できるものはどんどんデジタル化して業務効率を上げていくという流れにある。そういった場面で女性が活躍できる社会が実現できると良い。

【北山委員】

- ・二次交通について、リニア駅から通称「丘の上」と呼ばれる中心市街地へどういう形でつなげるのか、期待するところである。
- ・基本目標1の「稼ぎ、安心して働ける」環境が実現できるような、リニア駅周辺の商業エリアや居住エリアの整備について、JR東海とも話を進めていただきたい。
- ・商工会議所といった地元経済団体とよく情報共有し議論していただきながら、取組を進めていただきたい。

【細田リニア推進部長】

- ・広域交通拠点という位置付けの中で、飯田市だけではなく上伊那といった他の地域の拠点を含めて、いかにスムーズにシームレスに接続していくかということが重要だと考えている。
- ・二次交通のあり方検討においては、各地域に拠点を仮置きし、拠点と拠点を結ぶルートやその距離を勘案した上で、現段階で考えられるモビリティと次世代モビリティの方向性をお示した。
- ・具体的なビジョンはこれから検討していく段階であり、例えば自動運転の分野においては、デジタル化が進む中で3Dデータを駆使するといったような技術の進歩もある。実証実験を繰り返す中で進めていくことになる。
- ・デジタル化推進については、まずは新たな行政サービスあり方について、外部の専門機関や民間事業者の提案などを参考にして進めてまいりたい。
- ・そのためにまずは人材育成の部分についてしっかりと対応したいと考えている。

【細田リニア推進部長】

- ・過去、デジタル化は手法の一つであったが、デジタル田園都市国家構想が掲げられている現状においては、デジタル化そのものが大きな施策の一つになってきていると感じている。
- ・デジタル化は全体的に地域振興の底上げにもつながるため、議論と実践を重ねる必要があると考えている。

【細田リニア推進部長】

- ・3重心による機能と構造のまちづくりの考え方にに基づき、リニア駅周辺に産業集積を含めたリニア活用グリーンエリアを設ける計画だが、中心市街地を中心とした都市重心ともしっかり関連させる必要がある。そのための二次交通のあり方をしっかりと考える必要がある。
- ・リニア駅自体も駅が終着点ではなく、地域の拠点となりそこから人の流れが広がっていくような機能をしっかりと発揮できなければならない。そういった意味においても、行政の思い込みによる取組ではなく、経済団体の皆様としっかりと議論を交わした上での取組を推進していく。

【申原産業経済部長】

- ・産業経済部としても、エス・バードを含めたリニア駅の周辺についてどういう形の産業開発であるべきか検討している。併せて今ある中心市街地の資源を生かしつつ、新たな価値も作っていくという視点で取り組む。

【青山委員】

- 起伏のある地形が飯田市とよく似ているサンフランシスコでは、坂を移動するためのケーブルカーがあり、移動すること自体が楽しみという側面がある。移動手段も目玉であり、インスタ映えするようなものであると行政が情報発信しなくても来た人が宣伝してくれる。

【筧委員】

- 飯田市は自然豊かであり、これはオックスフォード大学やケンブリッジ大学のように、緑に囲まれた環境の中で学ぶことができる恵まれたロケーションだと思う。さらにリニアによって時間的距離が短くなる。例えば観光施策ばかりに集中するのではなく、大学院大学の設置とか、大企業の教育セミナーを実施してもらうなどの発想はあるか。

【中村委員】

- 住民である地元の人が使いやすい駅であることが重要だと思う。飯田に移住して東京や名古屋に通勤、通学する方を増やすことによって、丘の上の活性化や人口増につながる。飯田のリニア駅の利用価値は、飯田にいても気楽に東京や名古屋に行けることだと思う。
- 二次交通のあり方についても同様のことが言えると思うが、地域住民にとって利用しやすい駅というものを考えていただきたい。

【森竹委員】

- リニア整備に係る用地取得において、取得の対象とならなかった土地がわずかに残ってしまうという事例があるかと思う。地権者としても所有していても仕方ないというケースが多く、手入れがされずに雑草だらけの土地になってしまうと、景観上の問題が出てくる。こういうケースへの対応をしっかりとっていただきたい。
- 高齢化が進む中でどうデジタル化を推進していくか。高齢者も含めて広く市民へデジタル技術を普及させるための手段を考えていただきたい。

【細田リニア推進部長】

- 先日開催したオンライン意見交換会においても、同様の意見をいただいた。整備費用の面や情報発信の面で最も効率の良く効果が高い手段を選択することとなる。また、技術的な進展にも対応できる柔軟さも必要である。

【細田リニア推進部長】

- リニアによる時間短縮効果が最も顕著に表れるリニア沿線の地域が飯田だと思っている。その中で、市が大切にしたいと考えていることは、地域らしさを失わない駅であること、駅自体に求められる機能は保ちつつも利用者に地域らしさを伝えられる駅であることである。飯田の地域らしさの一つである環境や景観に十分配慮し、生かしていく。
- リニアに関しては様々な考え方があることは十分承知している。リニアによって飯田の価値を高めるにはどうすればよいか、多くの皆様と議論を重ねる中で方向性を示してまいりたい。

【細田リニア推進部長】

- ご指摘の通り、リニア駅が地元の人の居場所になることが魅力の一つだと考えている。住民にとって駅自体が過ごしやすい場であり、使いやすい場であるためにはどういった仕掛けが考えられるのか、議論を積み重ねてまいりたい。

【細田リニア推進部長】

- ご意見いただいたようなケースの土地は、残地と呼ばれるもの。まずリニア駅周辺エリアを設定する際に、なるべく残地が発生しないように北条地区の皆様には十分配慮しながら進めさせていただいた。その後の道路整備等においては、どうしても残地が発生する場合があります、土地の価値が下がったことに対して残地補償を行い、ご理解をいただきながら用地取得を進めてきた。
- デジタルデバイト（情報格差）へのアプローチとして、市としても一般向け講座を開催したところ、定員の5倍以上の申込みがあり、高い需要があるものと認識している。デジタル社会に取り残されないために、行政としても組織的にフォローする取組を組織的に展開していくことが重要だと思う。

いいだ未来デザイン 2028 第2回いいだ未来デザイン会議

「大学のあるまちづくり」について加藤大学誘致連携推進室長による説明

【加藤大学誘致連携推進室長（動画による説明）】

- ・飯田市企画部大学誘致連携推進室室長の加藤と申します。大学のあるまちづくりについてご検討いただくにあたり、下地となる情報として、当地域の現状と今後の見通しについて少しご説明させていただきます。
- ・当地域には、2027年度を目途にリニア中央新幹線が開業し、名古屋まで所要時間が25分、東京までは45分というように「時間的距離」が大幅に短縮される予定です。
- ・リニア中央新幹線の沿線は、6～7千万人が暮らす大都市圏が形成され、東の筑波研究学園都市から、西の「けいはんな」関西文化学術研究都市を含めた一帯を「ナレッジ・リンク（知の集積地）」として、そこからイノベーションを起こしていこうという構想を国は持っています。この沿線の中央に飯田市は位置しています。
- ・このような地域環境の変化を見据えた上で、信州大学の新学部がこの地域に与えるメリットを考察してみますと、まず地域で育った子供たちが、この地域に暮らしながら4年制大学に通うことができるということ、また、外部からの学生や研究者が集まることで、地域経済への好影響も期待されます。
- ・そのほかに大学の専門的な知見、研究と地域が連携し、DX時代に向けた基盤産業の強化や、当地域の学びの力（土壌）と結びつくことで、リニア時代の新たな価値や創造につながっていくことなどが考えられます。
- ・また、信州大学側にとってみても、この地域に新学部が設置されることで、三大都市圏とのアクセスが最も近いキャンパスができたり、都市域から山間地まで、多様性のある研究フィールドで地方創生に資する実践的な研究の推進が図られるといったメリットが考えられますし、長野県全体でみても、この地域に新学部ができることで県内の教育機会の均衡、県土の均衡ある発展につながっていくと考えます。
- ・このように信州大学新学部は当地域にとっても大学側にとっても双方にメリットが挙げられており、地域としてもその実現に大いに期待するところですが、更にその先を見据え、設置が実現した場合に、そのメリットを持続し、発展させていくためにはどのようにしたら良いのか、そのためには、新学部で学ぶ学生や研究者が「ここで学びたい」と思うこと、またそういったまちづくりを進めていくことが必要であると考えます。
- ・そこで、「大学のあるまち、つまり大学生を含めた若い人たちや研究者が暮らすまちのイメージを共有するため、学生や大学関係者の皆さんが「飯田に来たい」「飯田で暮らしたい」と思えるまちの姿について、地域の皆様方から意見をお聞きし、共に考え、進めていきたいと思えます。
- ・分野としましては、研究フィールドなどの学習環境面の充実や、暮らしの中の利便性向上、あるいは研究成果が地域に活かされ地域の課題解決につながっていくといった産学官連携など、色々な視点があると思いますが、このような「大学のあるまち」はここで暮らしている地域の皆さんにとっても暮らしやすいまち、住み続けたいまちになっていくと考えられます。
- ・「大学のあるまち」を創っていくため、皆様のご意見をよろしくお願いいたします。

いいだ未来デザイン 2028 第2回いいだ未来デザイン会議

「大学のあるまちづくり」について意見交換（フリーディスカッション形式）

< 1班 >

【筧委員】

- ・飯田市は緑にとっても恵まれてる環境。環境の保全と、開発をごちゃ混ぜにしないようにそれぞれ個別に明確に分けて推進していただきたいという要望が一つ。
- ・東京の学生にとっては、一部を除いて住環境が悲惨。学生に来てもらうためにも、アパートとかマンションとかに住むことに対する手当や補助を十分手厚く行う。そういった補助を先行的に打ち出してほしい。

【北山委員】

- ・2027年開業というのは、今の状況を鑑ると、非常に厳しい状況だと思う。そういう状況も踏まえて、このリニアの中間駅から、どういう形で人集めて、地域の学生もここに残ってもらえるようなまちづくりが必要。そのためには、もっと若い人たちや今の学生の声を聞いた上で生かしていく必要がある。

【竹内委員】

- ・要は学生たちに来てもらうためにどうするのか。18歳の人は免許は持っていても車は持っていないケースが多い。そうすると主な交通手段は自転車。
- ・通学はもちろんアルバイトや飲食店、遊ぶところにも行きたい、そういうふうになったときに、自転車で丘の上に行かないといけない。そういった課題があると思う。
- ・リニア駅周辺の開発において、若い人たちが集まれる、そういったスペースをイメージしながらまちづくりを考えていくという視点があってもよい。

【森竹委員】

- ・学生が住みやすい環境や、どれだけ学生にとって生活に負担がかからない環境を作れるかというのが、重要なことになると思う。

【青山委員】

- ・学生生活は吉祥寺で過ごしたが、遊ぶ場所があり、学生にとって居心地の良い個人の店がたくさんあり、学割もあったりして、まち全体が学生を大事にしている雰囲気があった。
- ・学生にとって良い思い出や経験が生まれる地域であるとよい。大学を卒業してもリニアを使ってまた来なくなる、集まりなくなるような。

【中村委員】

- ・学生は基本的にお金がない。ボランティアに従事するとボランティア通貨がもらえ、それを使って家賃が支払えたり、食事がとれるというような環境を作ることは大事。
- ・信州大学誘致に関心が集まっているが、せっきく飯田女子短期大学があるのだから、学生の声を聞いたりすることもお願いしたい。

【筧委員】

- ・石巻市の石巻専修大学誘致活動においては、町全体の熱意が高かった。今の飯田市と当時の石巻市を比べると、残念ながら温度差を感じる。地道な活動から市民全体を巻き込んで、機運を高めてほしい。

< 2班 >

【三浦宏子委員】

- ・私の息子が広島の公立大学に行ったが、当時は大学があることによって、街がすごく潤っていた。詳しい理由はわからないが、最近息子がその街へ行ったら、街のお店がほとんど潰れてたと言っていた。
- ・東京名古屋大阪がとても近くなるといったメリットはあると思うが、大学ができることで良い街になるとは考えてはいけないと思う。信州大学が飯田に設置されたとしても、飯田の高校生がすべて進学するわけではないし、飯田に定住せずにリニアで東京や名古屋から通勤するという大学関係者も多いのではないかな。デメリットや不安因子を検証した上での誘致活動であるべきだと思う。

【福岡委員】

- ・あるテレビ番組でアメリカの学生から非常に人気のある大学の例がとりあげられていた。その学生になると世界4か国を旅することができるそう。学生は勉強ももちろんのこと、そういった貴重な体験を求めているのかと思う。
- ・企業の立場からすると、学生が地元企業を知り、実際に交流できる機会が多くあることが魅力につながると思う。企業の研究職や経営トップ、自治体の長などと話をする機会が持てるということもPRポイントなると思う。
- ・飯田市は自然環境に恵まれている。そういう環境の中でこの地域ならではの体験ができることがメリットになるのではないかな。
- ・私たちのような地元企業からすると、せっかくこの地域に学びに来たのであれば、卒業後の進路もこの地域に繋がるような取組を期待する。

【杉山委員】

- ・大学ができることによって大きな人の流れができるのがメリットだが、リニアによって時間が短縮されるため、学生を含めた大学関係者がどれだけ飯田に留まってくれるのか。東京や名古屋に住んでいてリニアで通うだけというケースもある。飯田に住んでもらうのか、リニアを使って飯田へ通うだけでよいのか、その辺りをしっかりと考える必要がある。
- ・飯田に住んで学ぶメリットを考えると、この地域でできる体験。例えば、ゼロカーボンの家でかつ快適なアパートに暮らせるとか、あるアパートは入居条件に公民館活動や自治会活動をすることがあって、暮らしているだけで住民とのつながりができて第2の故郷が飯田になるなど。そういう飯田の魅力を生かした仕掛けがおもしろいのでは。
- ・大学に身を置いている立場から申し上げると、研究、活動フィールドがあることが魅力。その中で企業とコラボできたり農家の方と一緒に実験ができたりして、地元住民も大学の研究や教育活動に深く入れるといったオープンな仕組みがあるとより魅力的。

【下平委員】

- ・大学誘致については、過去に大学設置プロジェクトがあったかと思う。今回新たに大学誘致を展開するには雇用や経済効果、用地など様々な課題があるかと思うが、やってみないとわからないことも多々ある。
- ・誘致の実現は、市民も望んでいると思うが、まだまだ熱量が小さい。市民の熱量を上げるために、各地区で講演会を行うなど、地域の中で大学のあるまちのイメージを育てるような活動も大事。地域全体の熱量を上げるための努力が必要だと感じている。

【森下委員】

- ・信州大学の誘致活動は地元で熱が上がる必要があると思うが、地元で話題に挙がるのがあまりない。リニア駅周辺の上郷座光寺から熱を入れていないと、長野市に設置さ

れてしまうのではないか。

- 飯田女子短期大学が男女共学化されるなど、機運が徐々に高まってきているように感じるが、もっと必要だと思う。私自身も頑張りたい。

【下平委員】

- 大学のあるまちづくりを進めるにあたって、飯田女子短期大学が男女共学化になることがどういった意味を持つのか、しっかりと考えていかないといけないと思う。
- 行政の役割として、大学のあるまちづくりを都市計画に組み込ませることが重要。

< 3班 >

【石神委員】

- ・初等中等教育と違って、大学があることで情報発信やその他分野において、この地域から広がっていく。その力をさらに強くすることを地域の中で考える必要があると思う。言い換えると大学は磁石のようなもので、いろいろなものが引き寄せられて雪だるま式に大きくなる。電磁石が電気を供給しないと磁石として働かないように、地域がどうやって電力を供給するか。そういったことを考えることが課題としてある。

【遠山委員】

- ・4年生大学の学生がこの地域に住むということが地域にとっても初めてのことで、学生にとって住むこと自体が魅力になるようなまちづくりが必要。学生にとって住みよいまち、学生にとって利便性の良いまちという視点は必要だと思う。
- ・情報系の学部が来るのであれば、この地域自体もデジタル人材を受け入れるだけの下地を作っておかなければいけないと感じている。そして大学を卒業した学生がそのまま飯田市に住み続けて仕事をしたり、活動ができるような環境づくりも考えていかなければいけないと思う。
- ・今やっている高校生と大学生との連携事業や、大学と大学の連携というものがかなり頻繁に行われていると聞いているので、信州大学誘致においてもぜひ活用していただいて、いろいろな繋がりや広がりというものを、深めていける特色ある大学ができればよいと思う。

【三浦弥生委員】

- ・大学誘致に関して、南信州が若い人たちのパワーをいただく中で刺激を受けて、また新たに活性化していくことは、本当に望ましいことだと思う。そこにリニアが来るということで都会と短時間で結ばれる。都会から通う学生もいると思うが、飯田市に腰を下ろして学んでいただけるような、この地域が学びのフィールドになるとよいと感じている。
- ・情報系学部の学生が探究心を持って学ぶことができる地域であるためには、この地域が果たす新たな役割が出てくるのだと感じる。
- ・来年度、飯田女子短期大学が男女共学化される。また、専門学校の飯田コアカレッジもあるので、地元を中心とした若い人たちの学びにおいて交流が生まれたり、人へのサービスやケアを学んでいる飯田女子短大の学生とつながることで、何か良い影響というものが相互にあるのではないかと思う。そういった交流が生まれるための地域のあり方を私達も整えていく、または支援していく必要があると思う。

【永井委員】

- ・信州大学に飯田を選んでもらうためにはリニア以外にも魅力が必要だと思う。4年生大学は飯田に無いが、学輪 I I D A の取組で培われたものを飯田の特色としてアピールすると良いと思う。

【熊谷委員】

- ・大学ができれば子供たちの流出も減るのではないかと思うので、こんなにうれしいことはないと思う。ただし、学生がアルバイトできる会社が少ないような気もするので、そういったことも考えていただきたい。

< 4 班 >

【中田委員】

- ・具体的に検討されている学部は。

【林企画課長】

- ・正確には信州大学からこの学部というのは出ていないが、少子高齢化で大学もかなり運営が厳しい状況の中で、新学部の設置が認められるとしたら、地域の地方創生に資するもの。地域と一緒にあって、新たな産業や人材育成など、新たな価値を作り上げていく地方創生の取組において、政府はDXを中心とした人材育成について強力で押し進めている。そういった視点からすると、新学部の設置によって、おそらく情報系のDXに係る人材の育成を目指しているのではないかと見ているところ。

【勝野委員】

- ・こういう学部に来て欲しいという要望を持っていないといけない。大学が来ることは、まちの振興に関わってくる非常に大事なこと。飯田のまちの将来構想を、大学に託すぐらいの迫力をもって、大学にお願いするぐらいのことをやらないといけない。ただ来てくださいというだけではいけない。飯田のまちを、DXを使ってこんな町にしたいから必要だから来てくれるというぐらいの気迫でぜひ訴えていただきたい。
- ・とにかく大学は絶対必要で、このまちを進化させていくためには、大学とその関連するコアとなる企業、この二つが無ければ、大学だけ来ても意味がない。企業と組んで、このまちを発展させようということをよく考えていただいたうえで、大学誘致に取り組んでいただきたい。
- ・絶対取りこぼさないようにしっかりアピールしてほしい。来てくださいと言うだけでなく、飯田市の発展のためには絶対に必要なので来てくださいという迫力を出していただきたい。

【中田委員】

- ・飯田市では学輪 I I D A に取り組んでいて、非常に面白いと思うのは、大学がないからこそ、むしろ集まれたという面白さもあったと思う。今後連携することもあると思う。
- ・情報系学部としてどう絡むかわからないが、歴史研究所という地域の学問を担ってきた場があって、業界の中では評価が非常に高い。飯田は、大学生ではないが研究者を抱えてきたという文化が元々あるところであるため、今あるものとうまく組み合わせることで、産業はもちろん人材育成もうまくできるし、面白いことができるのではないかと思う。
- ・我々世代と一緒に学べるような、市民が学生と一緒に学べるような場にもなっていく良いと思う。

【菅沼委員】

- ・高等学校教育を受ける機会を、地域の皆さん、地域の子供たち、若い世代が得られるというのはすごく重要なことだと思っている。地域の中で大学まで学べるというのはすごく大事なことであると思う。
- ・I ターンによる人材の獲得も同時に重要になってくると思っている、市長が進めている事業の目指すところであると思うが、魅力的な飯田市であり続けないと、大学が設置されたとしても、学生がそのまま定住せずに、卒業したら地元に戻りますとなってしまう。大学の誘致とあわせて、魅力的な飯田市を作ることを継続して、学生が定着する仕組みを作っていただきたい。

【佐々木委員】

- ・説明にあった、大学があることによる地域としてのメリットは、ほぼ網羅されている印象を受けた。新学部は情報系と言われているが、住民の皆さんの中にある大学のイメージと若干違う気がする。住民の皆さんは大都会にある総合大学の誘致という印象を抱いていると思うが、あくまで信州大学の一学部で、地方の大学であるということ、また、どんな思考を持った学生が信州大学には来ているのか、そういった点も意識した方がよいと思う。今回のチャレンジが駄目になってしまって、また違う大学という話だったら、またリセットされることになるが、やはり信州大学に行きたい学生を、今度は地域をどう取り込むかということは意識した方がよいと思う。

【山上委員】

- ・伊那市に信州大学のキャンパスがあるが、大学があることに係る伊那市の独自の取組といったものはあるのか。例えば学生が卒業して、そのまま伊那市で就職したり、起業したりして住み続けるということを狙って取り組んでいることはあるか。

【林企画課長】

- ・伊那市の情報は持ち合わせていないが、会津大学の事例では、企業と一緒に共同研究をしたりするなど、地元企業と関係性を作って取り組んでいると、比較的そのままその地域に学生が残っていくという流れができていく。取りこぼさずにそういう学生の受け皿を作っていくような支援というのは必要だと感じている。

【藤本委員】

- ・信州大学新学部の誘致は、まず飯田市が一番先に手を挙げ、その後、長野市も手を挙げて、大学側ではもう少し詳細を検討したいということで、現在に至っている。飯田市は、今まで通り運動は続けていくという姿勢であると思う。
- ・地域の人たちとか、市民がより多く誘致活動に参加するためには、キャンパスはこの辺に設置するとか、学者はこのような顔ぶれであるとか、そういう目に訴えるようなリーフレットか何かを作って配布するといった手法もある。そういったことも機運の醸成につながるのではないかと考えている。

区分	氏名	団体	役職
1	藤本 勝	橋北まちづくり委員会	会長
2	下平 勝熙	竜丘地域自治会	会長
3	熊谷 兼富	上村まちづくり委員会	会長
4	森竹 和己	飯田商工会議所	常議員
5	中村 彰	みなみ信州農業協同組合	代表理事・専務理事
6	高橋 充	(株)南信州観光公社	代表取締役社長
7	三浦 弥生	飯田女子短期大学	教授
8	北山 良一	飯田市金融団	代表幹事
9	菅沼 幸記	連合長野飯田地域協議会	事務局長
10	佐々木 崇雅	南信州新聞社	記者
11	永井 祐子	飯田市社会教育委員会議	副座長
12	山上 芳雄	飯田市社会福祉協議会	総務課・地域福祉課長
13	本田 守彦	飯田国際交流推進協会	副会長
14	三浦 宏子	ムトス飯田推進委員会	委員
15	福岡 健志	地域ぐるみ環境ISO研究会	事務局
16	森下 たまき	飯田市環境アドバイザー連絡会	会長
17	青山 貴子	防災士	
18	小林 大悟	(一社)飯田青年会議所	理事長
19	遠山 典宏	山暮らしカンパニー	
20	勝野 薫	公募	
21	笥 孝夫	公募	
22	竹内 文人	しんきん南信州地域研究所	主席研究員
23	石神 隆	法政大学	名誉教授
24	中田 めぐみ	農山漁村文化協会	編集局
25	杉山 範子	名古屋大学	特任准教授